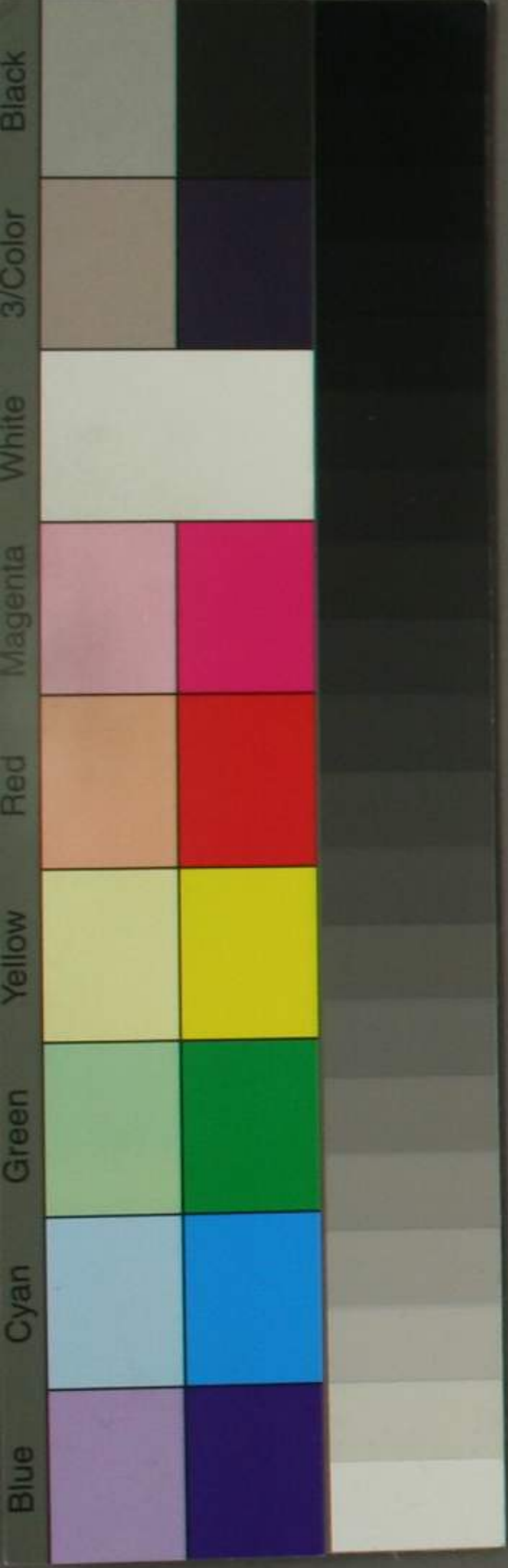


日露戰役史料 第一卷

早稻田大學

戰役開始前諸情報二閣元新聞記事抄出

2107
1



伊5
2107
1



戰事前、諸狀報

東京日々新聞所載

目次

- 一、極東問題（美国各新聞記事）
- 一、露國新聞、日露陸軍評
- 一、露佛同盟、敵（ノロウオ兵、ウレミヤ紙所載）
- 一、露人、日本觀（同上）
- 一、日露交涉事件（ノロウオ兵、ウレミヤ紙所載）
- 一、三國干涉、管轄（倫敦タイムズ）
- 一、露國、對清政策（ノロウオ兵、ウレミヤ紙所載）
- 一、日露孰勝（エバクテリター）
- 一、英國、地位（同上）
- 一、露將、滿州評有論（ノロウオ兵、ウレミヤ紙所載）
- 一、露人、極東問題（同上）

一、極東問題ニ對する日本ノ地位（モリスン、ポースト）
 一日露國戰前ノ戦局（倫敦タイムズ）
 一日露外交ノ秘密

極東問題

近着ノ美国新聞ヲ見ルニ日露間ノ問題又喧レケ
 去月十二日日露國ガ馬山浦（龍巖浦）ヲ争テレケ
 日領ニ又日本ハ露國ノ朝鮮ヲ平令セシトノ提議
 ニ對シテ最終ノ通牒ヲ聖彼得堡ニ送りタリトノ
 愛報傳訊ニ達シテ新聞界ノ大注意ヲ惹キ各新聞
 ハ急ギ社員ヲ日本公使館ニ送りテ其事存テ質テ
 シノタリ林公使ガ中央通信社員ニ答一タリトイ
 フモノヲ見ルニ公使ハ最終通牒ヲ送レリトイフ
 報道ヲ排斥シテ且曰ク
 若シ然ル事アラバ日英俄高ノ趣意ニ從テ年ハ
 先ヅ本國政府ヨリ通報ニ接スヤキ筈ナレバ其

ノ事ナシ但シ余ハ本国政府ヨリ通報ニ接シ居
ルモ其レハ左様ノ性質ノ物ニアラズ日露間ノ
開戦ハ勝敗如何ヲ問フズ西国ニ取テ若ク一大
損害ニシテ幕ヲ避リヤキモノナリ但シ事件益
々急テ告グルノ場合ニハ日本ハ英米ノ能動的
同情ヲ有スルニ至ルバキナリ然レモノナリ日
英西国ハ年来提挈シ今又善ク相知リ相解セリ
露国ハ滿州ヲ撤退セザルハ英米ニ於ケルガ如
ク日本ニ於テハ民團憤懣ノ情アリ而シテ日本
ニ於テ主戦派ノ意見ガ固キ上ニ何程ノ勢力
ヲ有スルカハ余ノ断言スル能ハカク所ナシ也
天皇陛下ハ何レノ場合ニモ常ニ国体ノ

輿論ヲ察セラル云々

聖朝十月十三日ノタイムスハ社説ヲ草シテ此ノ
問題ヲ論ジ英米ノ能動的同情ニ就テハ直接ニ論
及スルナキモ事態ノ十分重大ナリヲ認メテ朝鮮
ノ欲ス保全上ニ懸カコテモ侵害スルニ至ラバ日
本ハ之ヲ開戦ノ理也トストモ矢當トセザル旨ヲ
説キタリ今其要旨ヲ摘メハ先ヅ日露交渉ノ涉々
ニカウズヤシテ談判ノ地ヲ東京ニ遷シタルノ矢
策ヤルヲ論ジテ曰ク
近以日露干渉ニ関スル風説ハ概テ誇張捏造ノ
跡アルモ事態殊ニ至ラシムルモノアリヤハ疑フ
べカク日露間ノ交渉ガ今日マデ甚ダ

と運び居らざらんヲ説クハ獨リ英固ノミコアラ
ナルナリ西國交渉ノ基ハ露國ノ近時朝鮮殊ニ
鴨綠江畔ニ旅ケル行部及ハ滿州ニ欲シ継続ヲ
想ハシムル行爲ニ在リ日本カ始メテ露國政府
ニ照會提議スル所アリシハ八月下旬ニシテ朝
未救週露國ハ曖昧模稜務トアセテ引延ハカシ
トセリ蓋シ露國ハ時日ヲ遷延スルノ利アルヲ
見ル場合コイ毎々其手放テ執ルモノナリ近
日商議ノ地ヲ東京ニ移シタレ氏其變更ハ決シ
テ好徵候ト認ムンヲ得ガハナリ商議ノ聖彼得
堡ニ行ハ、間ハ近ク韓國皇帝ノ陛下ニアリ露
國ノ平和ヲ憂スルニ切實ナルハハ輔弼大臣中ノ

主戰派ノ志望ヲ抑制スルニ於テ裁命ノ計アル
ヲ想ハシムルニ其地既ニ極東ニ移シハ露帝ノ
慮モ亦之ヲ折制スルノ計カヲ減ズ且交渉ノ
議ニ參シ其案件ノ決定ニ與ラテ大ニ力アルモ
ハ露國侵畧派ノ首欲其人ニ外イラザンナリ
固ヨリ最後ノ断ヲ與フルハ皇帝ニ在ルモ亦カ
モ豫備交渉ノ意氣込テ定メ又皇帝ノ取テ以テ
断スル所ノ發議ハ其等ノ首欲即チアレクニ
フ大守及バハロフニ使等ニ成ルモノナリ大守ノ
権力上ヲ動かスノ大ニシテ且雄圖ヲ懷クノ士
其地位ニ在ルニ~~是~~テ何ゾ其謀仰悞掌ヲ望ムン
ヤアレキニシテ太守ハ清帝ヲ助ケ彈壓ヲ強定

スルヲ録シテ滿州合係ノ策ヲ立テ以テ其大守
職ヲ得タルモノナリアレクニシテガ更ニ一歩
ヲ進メテ滿州ニ行ハ所ヲ朝鮮ニ施サント云フ
又豈誣フトセシヤ其朝鮮ニ施ケル即手願同ト
ミテ才略相讓ラザルバウロフ氏アリアレキ
ニシテガ滿州ニ有及薩東ヲ在欲スルノ道ヲ南
キタルモノ即當時ノ駐清代領公使バウロツ
フ氏ノ外交手腕ナリ不レテ今此朝鮮ニ公使ヲ
リ則日露交渉ノバウロフ氏及アレクニシテ
太守ノ掌握ニ存スルニ施テ其ノ鄭モスレバ平
和ノ道ニ利アラザルヲ見ルハ怪シムニ足ラザ
ルナリ

タイムスハ至ニ露國新報ノ滿州問題ヲ論評シテ
其ノ意ノ在ル所疑フ可カラザルヲ説キ更ニ日本
ノ朝鮮ニ施ケルヲ繁ク論ジテ露國新報ノ言論最
モ注目ス可ク又最近危殆ナレハ朝鮮ニ平ズルモ
ハナリ日本が朝鮮ニ特種ノ利益ヲ有スルハ英露
共ニ之ヲ認ムル所不カレアレキニシテ太守ノ機
関紙ハ日本人ノ朝鮮駐任ニ制限ヲ附シ又露國欲
办ニ在ル日本ノ人ノ固~~謀~~ヲ嚴制スハナリ勸告ス此
レ莫ニ平和ヲ愛スル者ノ言ナラレヤ此ヲ以テ果
シテアレキニシテ太守ノ意トセバ露帝が急ニ羅
馬訪問ヲ見令セ日本が経歴ニ當ナル武官ヲ参謀
本部次長ニ奉ゲ露國が戦備ニ急ナンモノ不怪シム

不足ト論じ在ノ言ヲ以テセリ結ハリ
此際日本政府ハ日本条約ノ全項ヲ遵守シテ西
國ノ利害侵害セラレシムル場合ニハ互ニ復
藏ナク辭ホニ其意ヲ相告ゲンコトヲ信セント
欲ス此レ日本ヲシテ燥暴急遽ノ行動ヲ加フシ
ムルニ於テ安全ナル保證ナル可シ然レハ事情
ニ依リテハ無為ノ復タ行フベカラズ或ハ得策
トセザルハ復疑ノ可カラザルトナリ

極東問題

五月十三日ノ停戦ゲヒトブハ林公使ノ美國ノ能
動的同情トイエルヲ捉テ美國ハ條約ニ依リテ
事件急リ去ケル場合ナリ必ズセナクハカラガ

ルヲ論じて日リ

美國ハニハ滿州問題ヲ以テ政治上危シクハ商
業上^弊ノ利害干渉ナシト思フノ情大ダ盛ナリ
又此レ極ナテ危險ニシテ又謂レナキノ甚コキ
モノナリ其ノ如キ理想ヲ以テ日英同盟条約ヲ思
々ニ~~過~~過スルノ過ナクナリ條約ナニ條ニハ一方
ノ締盟國が天裁スル場合ニハ他ノ締盟國ハ嚴
正件立テ守ルハナキ旨ヲ規定セリ之ヲ推スニ日
露開戦ノ場合ニハ英國ハ局外傍觀ノ地位ニ立
ツバキ義務ヲ負フモノナシ凡前条ヲ見ルニ締
盟國ノ一ハ他國ノ侵略的行為ノ為ナニ利害ヲ
侵害セラレハ場合ニハ獨立シテ自家ノ利害ヲ

防 獲スル絶對的權利アハモトセリ既ニ滿州ニ
起リ又現ニ滿州ニ起リタムモ即是ナリ又若シ
英國ニシテ為ス所ナリレハ將來亦然ラン且條約
ノ序文ニハ英國ハ清國ニ特殊ノ利益ヲ有スルノ
語アリ乃^ハ英國ハ日英同盟ナキモ必ず清國ニ於
ケル利益リ有スルト共ニ多少ナガラ共通ノ利益
ヲ有シ而シテ之ヲ保護スルノ手段ヲ擇グニ於テ
兩國亦各自自在ナルヲ得条約ナキモ明ニ其ノ
情勢ヲ認メテ一方ノ利益侵害ヲ受ケル場合ニハ
西國ハ互ニ腹藏ナリ詳カニ相通照スルニシテ規定
ナリ西締盟國ガ共同ノ行動ヲ執ルヲ必要トス
ルガ身ハ直接ノ干渉アル邦國ノ單獨行動ニ一任

スベキカハ此通照ニ依リテ定コルベシ然レモ露
國ノ侵略的行動、為ナニ北清ニ於ケル利益ヲ侵
犯セラレハ日英兩國共ニ一ニシテ而シテ兩國
同盟ノ最大聯繫タムモハ利益共通ノ上ニアレ
ハ兩國ハ必ずシモオニ條ノ嚴正中立ノ各項ニ
東セラレ、ヲ要セザンナリ
但林ニ於テモ亦極東ノ形勢固ニ危急ヲ告ガルニ
至レリヲ競ナ獨ニ政府ノ機密外北極遠ガセワト
ハ此ナク亦前週教日國ノ報章ハ日露干渉ノ再ビ
急ヲ告ガルニ至レリヲ見レ然レモ未ダ確報ノ甚
情ヲ審ニスベキモノアラズ今後教日國ノ電報ハ
必ズ之ヲ明ニセシムハモノアラント説キタムヲ見

レバ管時 政州ニ於ケル 流統ノ甚カ盛テリシヲ知
ルバシ 然レ以 獨ニ新 國界ハ日露 開戦ノ必ス 免カ
ル可カラザルシ 説カゴロ ン、ガセフトハ 謂
ヘラク 日本ハ今 極東大守アリシ 一フト 商議シ
公使ローゼン 男ハ 旅順ニ 駐テ 大守ト 會見セリ 然
レドモ 日本ハ 戦ニ 併フニ コトヲ 為サハ ン可シ 日
英 俄 約ハ 亦ノ 國ノ 参加シテ 一方ト 相戦フニ 至リ
テ 始メテ 英國セリ 却タルヲ 相約スルモ 此ノ 才
ニ 國ハ 熟シザ 日本 若シ 戦ハ ン 單獨ニ 露國ト 相戦
フヲ 要シ 不シテ 決リ 孤立ハ 必ズ 日本ヲ 一テ 躊躇
セシメ ン 露國 亦 政州ノ 地位ニ 顧レバ 決一 事亦 之
ヲ 示シ 戦ヲ 避ケシメ ン

極東問題(三)

去月十七日の停戦スベクテ 一タリハ 日露 開戦ハ
虞ハ 平和ノ 望ヲ 有リト 大古ク 恐ル、ト 説キ
先ッ 平和ヲ 致スルニ 事情ヲ 挙げテ 亦一 露帝ハ 心
中 戦ヲ 嫌ム 其故ハ
(一) 其ノ 健康 戦ヲ 許スズ 露國ハ 戦時 皇帝 出デ、
元帥 在ラセ 例ト 寸 差シ 然ラ 亦 ン 征 軍 國 外ニ
相 関ギ 又 兵士 好ム 所ニ 覺ス 戸山一 世 既ニ 之ニ
若シ 其 自家ノ 見ル 所ニ 由ル 司令 官ヲ 簡 拔スル
こと 能ハ ざリキ (二) 日本ト 戦ハ ン 必ズ 永シ 清國
ノ 向 背 歎 ム ヲ カラ ざる 可ナラ ず 若シ 海 戦ト
敗ル ば 根 據地ノ 歎 ム ヲ 亦 七ノ 如シ (三) 日本ト 戦

は、近て土耳其の宗教熱狂派を鼓舞奮起せし
むるに至るの所ならず土耳其政府に對する權
力を一に其の怖る、所を極遠に移しむるに
至らん(一)戰備未だ全からず獨り西利亞^旧鐵道に
完全にしん又日本海軍に至る極めて遠き以上
まらざ戦ふには公債を募集せざるべからず而
か上近時大藏省の情形は募集に便ならず
因る露帝は少しとも滿州の設備十有五年に
戦ふことを欲せざるべし(二)戰意下らんば
政府大臣亦之を強ふる能はず加之他は之を牽制
すべし事情あり

(一) 歐洲に葛藤を誘起するの虞あり (二) 至大の軍費を耗

給するの必要あり又(三) 太平洋に最鋭最鉅の軍
隊を送るの力難しからざること
日本に於ても亦平和に傾かしむる事情あるが故
に攻撃を委くるに非ざらんば自ら進んで戦を圖く
まじ何と云はんば
二 日本政府は戦争の危険を回避せしむるを解
し假令勝つても露欲を阻むと征服するの期すべ
からず而して若し海軍に敗れば國意の存立に
関する三將校兵士孰れも露國の資源大なるに及
ばず財政亦露國に勝つこと無かりん
然りと雖も南戦の虞に至りては更に大なり露國
に在りては

露國人民は日露戦争を期し頻りに其準備を修め其の大將校練に未だ曾て太平洋に至らざるものには日本を侮り一挙之を殄滅し得べし決して之が爲めに士耳其若しくは獨りも憂ふるを要せずと存す又謂らん伊國は露國の同盟有り英國は近ごろ伊國と相親めば必ず戦ふことを辞せん之に乗ずべきの時なりと其説く所は朝鮮と一挙吞噬せんと欲するもの有り極東太守アレキシエーフの如き蓋し其の人有り大宇に至る大の権威を有し命して露帝は既に其等の大権を許すに於て妄に其の行動を掣肘せざるを例とすアレキシエーフが日本と戦ふを欲せしむ

理たしとせず勝をば即ち威名及ぶもの無かりん露國は既に滿州に二十五万の大兵を駐屯せしむ財政力困難あるも従来露國は華を行ふに當りて甚だ意とせざるものなり更に日本に在りては

均く戦備に急に陸軍は皆以て戦ふに足る惟に騎兵は比較的弱きを憂ふるのみ陸海軍人亦戦を願ひ歐洲人と對等の兵たるを求むるを露國は日本は朝鮮を他國に委棄せざるを以て政界の根本とする政治家亦今日を以て露國と戦ふの如時機と爲し一日を緩つず小は刻ち一日の放あり既に滿州を擧げて露國の有と存せば朝鮮

亦危きを信ずるに似たり且東欧の事情を解し
露国の不便とする所を知るためたし朝鮮送兵
の報は是れ信ずるべからざるも林公使が従来戦
争の説がさるを以てしんも今則ち其の或は之
をまよはせざる而して其の場合には美国の助け
あるを期するを謂ふもの似る局面の変化を以
て可し

日露戦争の勝敗に至りしは處に言ふ難きをものあ
り大陸諸国は直に露国の勝つ説くを以て未だ日
本が其の戦争に有する利害を審みせざるもの存
りといふ者も情状を比較し最後に討じ今日曰
本は其教界の相若かば露国と破るも得ん其の場

合には黄色人種の諸国が政界及び黄色人種以外
の欧州諸国の政略に一新生面を呈人に至らん

露国新聞、日本陸軍評

(十月十四日發行ノ「ウオウレミヤ」)

近頃露国人の大ニ我東隣国ニ竟ヲ注ギ其陸海軍
ニ関スル評論、世ニ發表セラレタルモノ已ニ數
カニ及布シテ或者ハ之ヲ以テ模範的ノモノトシ
シ或者ハ爾ニ稱譽スルキモノニアラズトテ不
ノニ真理ハ常ニ斯カル場合ニ於ケルガ如ク中庸
ニナルモノナラン

日本ノ陸軍ハ我露国人ニ取リテ由々ニ干渉ナル
コト疑ナク孰チ日露將來ノ戦場ハ露国ノ中心ヲ
占ルコト遠キニ由リテ然リト察ス日本軍モ亦多
クノ欠点ヲ有セリ其第一ハ騎兵ノ少數ナルコト

馬匹ノ不良ナルト訓練ノ不行居ナルト云々
リ騎兵ノ數ハ戰時ニ於テ九十九大隊ノ上ニ出デ
ス即チ一万余乃至一万余ニ至テ日本兵力三
十分一ニ過ギズコト歐洲各國ニ比スル時ハ極
テ微々タルモ一ニシテ其千係ハ七分ノ一
比ニ乃至テ十分ノ一ヨリテ五分ノ一トス騎兵ヲ
増加スル重キル妨碍ハ日本工馬匹ノ數ノ少
ルニ在リ加フルニ實地視察ニテハ專門家ノ説ニ
依ルニ馬ノ身高カラズ騎兵ノ勤勞ヲ行フニ適
ズト云フ騎兵ノ數方テ干ト地勢ノ不適當ナルト
人ハ稠密ナルヨリ平時騎兵ニ相當ノ訓練ヲ施
スヲ得ズ概シテ大戦前ノ意味ヲ以テスル戰
闘的

素養ヲ施スヲ得ズ

日本政府ハ騎兵改良ノ問題ニ急テ注ギ他國ヨリ
種馬ヲ購入スルモ其希望スル如クノ騎馬駐馬
ヲ得ントスルマデニハ多クノ時日ヲ費ヤシテ可
サバハヲ得ザルバニシテ勤員令ヲ布キテ軍隊
ト輕重トヲ戰時ノ組織ニ纏ヒンガ爲メ多數ノ馬
匹ヲ要スルニ於テハ日本陸軍ハ非常ノ困難ニ遭
逢スヤク遠ク濠州邊ヨリ馬ヲ買ヒ集メテ日本ニ
輸送シ其ノ陸軍ヲ營々タル戰闘準備ニ整ヘタルニ
至大ノ時日ヲ要スルヲ免カシガレバシ
現ハ如キ態情ノ結果ハ言フニテモテ老輩ハ騎
馬ノ教ト性稅ノ缺失ニ對スル有様ノ影響日本ニ

歩々アルトニ就テハ其ニ言フニ及ビ之唯々凡
ソ陸軍ガ此ノ如キ情態ニアリテハ實戦ニ勝レデ
恰又暗キニ彷徨スルガ如キモノナルベキヲ一言
セシ斯ルハ軍隊ノ假令一時勝利ヲ在ルニ遠
ク敵ヲ追跡スルコト能ハザルヲ以テ其ノ勝利ノ
範圍ヲ擴張スル能ハズ全勝ヲ在ラセヨト恐
ラ其ノ力ノ及バザル所ナラシメテ而シテ万一敗
タラシニハ優勢ナル敵ノ騎兵ノ馬蹄ニ蹂躪セテ
ルヲ以テ全軍ノ滅亡ヲ来タスヲ恐マリ
兵種ノ最良ナルモノハ歩兵ナリ但シ其徳義的性
質ハ甚ダ高尚ナリト云フ格付ハ亦等ナリ日本ノ
歩兵ハ暖地ニ在テハ忍耐カノ強キヲ示セタリト

至テ果シテ西寒ノ地ニ在テハ亦然ルヤ否ナリ蓋
シ疑ハシニ中隊ノ兵ガ日本ニ在テハ通常ノ演習行
軍ヲ為スノ際操列ナル如クニ遣ヒ全軍強ド凍死
シタルハ近頃ノ率軍ナリ戦術ニ多クテハ日本ノ
歩兵隊訓練宜ナク得ラレシ似たりト云フ北清事
変ノ率軍ニ徴スルニ日本歩兵ガ地勢ニ深ク注意
ヲ拂ハザル欠点ナリ
日本ノ砲兵ニ至リテハ其ノ砲臺材料ノ不足ニ概
スルニテハ外新聞雜誌ニ傳説スル所ナリ要スル
ニ未ダ曾テ大戦率ノ苦辛ヲ經タレトナキ陸軍
ノ戦闘力ハ總体ニ在テハ中隊階級ニ難シ
日清戦率ノ戦場ニ採出シタル兵教ノ別名ニテ

ナハト敵ノ性後ノ不完全ナルニ由リテ吾人ノ
所謂大戦率ト見做ス能ハズ例ハ大戦戦ト称セ
ラハ、平壤ノ役旅順ハ威海衛ノ如ク如キ莫ク
於利着目スベキモノナラズ一千八百九十四年
九月十五日平壤ノ役ニハ日本ノ二個師團加ハリ
防備ノ位置ヲ襲撃シタレド要塞ノ陥落スルニ先
ガチテ支那人ハ敗北シタリ加之日本人ハ左領軍
充テ行ハシズレテ戦界上完全シタレト云
ヲ得ズ旅順ハ威海衛ヲ如キニ至リテハ陸
上ヨリ防備薄弱ナル以テ海軍艦ヲ襲撃シタレト
ニシテ抵抗カノ弱キヲ教ノ敵ヲ相手トシ特別ノ
劣ヲ費サズレテ却テ差シタルトモ

戦近三十五年間ニ日本人ガ先令軍備ヲ整フルヲ
得タルハ疑ハ大ニ下キナラズ也ガ素養ハ已ニ
日本ニ在リテ種々ハ沃土ニ蒔カレタリ日本国民
ノ勇武ナルコトハ史ニ証スル所ナリ日本ハ
右来此乱相次ガテ起リ人民ヲシテ戦術ヲ練磨ス
ルヲ得セシメタリ然レド將來大戦率ガ日本国民ノ
陸軍組織ニハ大試験ヲ與ヘ日本ガ其ノ一部ノ兵
カノミナラズ全カヲ欲望セザルヲ得ザルニ至ル
トキハ日本陸軍ノ勤作果シテ如何ナルヤキカ斯
ナル場合ニ際シタラシムル其ノ錯綜セル機械ヲ
動カスニ當リテ麻痺ヲ生ゼザルヤキカ若輩皆テ
爾キタル逸話ナリ而シテ其ノ逸話ハ信ス今日ノ

日本ニ應用ス下キスノナリ過ガル世紀ノ六十年
代ニ日本ハ不圖政州ノ樂器ヲ見テ其樂器ニ似
タル器械ヲ作ラント決心シ若心慘澹幸ニ成功ス
ルガ如リ外觀細微ノ異ニ至ルニテ殆ド政州ノ
樂器ト異イル所ナカリシニ唯一ノ足ヲザルニ
アリ如何ニ吹ケドモ音ヲ發セザリント云フ殊逸
活恐ウリ逸話ニマラズシテ事實ナリトナラシム
ク

露佛同盟の敵

露国外交論者として有名なるスカリコフス
キイ氏はノールウオエ、ウレミヤ紙上に本題を
掲げて下の如く論じたり

佛國ハ或部令に佛露同盟に反抗シ佛國を駐リ
美國との同盟に引入れんとする暗流あり先づ露
佛同盟反對の聲を揚げたるは現存國の指導者と
して現に之を自黨の凶虜視する社會党にいてシ
ヨールス氏同黨を代表しん反對論を主張しデシ
ヤ子ル及ハリボー西氏議會に於て之を反駁したる
に拘らず一度發表せり小たし説には替成者ナラ
ズ

曾てトーマス・スベルクルー及びエスワレナルデ
コンスタン西氏の主唱に依り議員と學者の一團體
撤兵実行永遠平和を以て仲裁の判を以て國際
間の争議を解決するの法を講ずるを口實とし
て倫敦に赴き英國の有志と相會したることあり
しが其會合の目的は空論に關する意見の交換に
りて寧ろ英佛同盟の方法を講ずるにありたり
下院副議長に一時現時議院に多数を占むる穩和
派の領袖エーエン氏は氏が曾て英國雜誌に掲載
したるそのと同主旨の論文をフイカコーに掲げ
て露佛同盟の同盟は依然其儘とし英佛親密
を加ふ可き必要あることを論じたりエーエン氏

の說に依ると露佛同盟は須く冷靜の見を以て評
價すべきものにして一十八百八十九年同九十年
の如き其同盟未だ無く露佛同盟を公然成立せ
んとするの計畫起りたる時に於ては佛國は假
令今年を執らざるも充分鞏固の地位を占め居り
たりと云ふ即ち恰も露佛同盟を要せざりしが如
くに説けり氏の說に依ると露佛同盟は露佛戦争
の影響を受け起りたる三國同盟に對する復讐
として起りたるものに露佛同盟は露國が極
東に對する野心を逞せんが爲めに露國に取らん
必要なりしもの現に三國同盟及獨乙に
對するより其英國に對し利用せらるること

多きと見え之を知るに足らざりしと云へり然れども
三国同盟の遂取政界が露佛同盟の成立に依りて
若し其鏡鑄を撰きたることにはエネン氏の敢
て在定せざる所なり

エネン氏はジョーンズ氏に及りし獨逸の提携
とんとすし輕率に少くも氏は獨逸の政略を以て
頗る機敏に且歎る手廣きものも着破したる獨逸
は露佛同盟とは勿論和蘭と孫とも親善と干渉を保
持し之に羅馬尼亞並とも加ふ可しつ、小亜細亞、
マニツコ、北米合衆國、南米、加奈太、暹羅及
支那に自國の利益を扶殖するに抜目長く不し
之の政略は英人の喜ばざる所なきを以てエネン

ン氏は即ち之に乗じて英國と提携すべしと主張
之と提携するに於ては英及同盟に於て英國の
謙歩せんこと疑はしと云せり
故ガンバツク氏及ハブーランゼー氏の腹筋アリ
フレドヤツク氏亦ベチーレバブリツク紙上に於
て英國との提携説を述べたり但し其説露佛的
あらざりし因轉活版なり氏は露佛同盟が戦争の
政界古より及りし英佛同盟は平和政界なりと云
い且氏は獨逸に對して締結されたる露佛同盟が
實際獨逸の利益とのみ相合ふことを証明せん
す

十ツク氏は此の意想外の奇説を証すに在りて

を以てせんとす曰く露併同盟の結果主として現
は小たすものは一千八百七十四年以後併同人の
臥薪嘗膽期待せし對獨復讎問題の放棄に在り該
問題は防禦の性質を有し左る結果として獨り亦
オン、ワルデルゼー元帥の統率することとを謀せしめたり
然れは獨りは経済上の千係に於て露併同盟より
贏得たる所のもの多し是未人アゲルスブルーフ
氏の著 *America's Big Game* に於て明に証す
る所なりと云々
氏曰く併同は一たの盟邦と得た以上其兵力
の膨張に助力せざるべからず而して目下兵力は
鐵道の多數と工業の發達に直接手廻り有するが

故に其點に於て露國に力を籍さざる可からず而
して工業の發達と鐵道の延長は巨額の資金を古く
して行ふこと能はず巨額の資金は公債を募るに
あらざれば得ること能はずを以て八十億乃至
百億法は併同より露國に轉送せらる小たり然れ
露國は美國の如く併同貨物の大率各にあらざり
氏又曰く露國は毫も我併同より購買せせざれば
強が毫も購買せざり而して他の方面より觀察せば
露國は自力にして自國の鐵道を經營すること能はず
すこと以て併同の金を以て此等の經營を獨り
り買入小たりと即
即ち氏は兵力が益々工業上に讓歩しつつある時

に當り伊国の露國に注ぎ込けたる金は盟邦の兵
力と鞏固にあつたが打后うす獨一の製造場工場
發達に益しし伊国製造場工場の損失と成りたり
若し露國の手を控へ獨一の轉入したる金を以て
伊国製造場に注ぎ込けたる金は伊国製造場の
贏得たる所國より夥しかりしと云ふに亦
り

氏又曰く英國は歐洲に於て毫も伊国より要求す
る所なし彼も英國は唯々故サリスベリ一卿の明
言せし如く各國間の境界を現狀の儘に係持せん
と欲するのみ是れ道理ある要求なり何んとなん
ば早晚必ず現狀維持の事實を是認せざるべから

ざるの時期到来すべし伊国は且ルサス
とローレシエスノ一命令の如く刻後には心する能
はずは勿論なりと雖も伊国獨一の戦勝を待
たらんには伊国伊予レシエの左岸キヨールン及
バコーインツ等を取らん即ち獨一の亦之に甘心
せざる時は如何、彼も獨一のレシエ臥薪嘗膽後讎
に及ばざらんは戦争の倒産終焉する時なく諸國露
國若し人は米利ガ二國の共に敗落國窮するに乘
りてマケン新聞の大陸各國を巧に形容したる如
く「歐洲の四分五裂したる今露國に其重き手を着
きたるに到らん然るに露伊同盟は前説する如く事
實上英國の理論的に主張する所と其軌を一に

てフラインクフルト條約を不変不易に遵守し歐洲
の國境を現在の儘に保持するの趨勢を来たせり
されば決然キリ見ても英國と提携するの妨碍あ
らざるなりと

佛國が英國と自盟提携するに依りて果して贏
得する所ありや否やは寧ろ佛國の政事家及新聞
記者の論ずべき所存するべき也古來の歴史に徴す
ると佛國人が夫の校権を有する英國人と同盟するに
依りて利する所あるべきや否やは蓋し疑はし我
國に七露英同盟の將策を有することと主張したる
のありたり英國は古來世丹到る處に能く佛國を
標め曾て佛と實際提携したる短日月間に能て

佛國は常に愚弄せらる英國は土耳其、下林、瑞
典及西班牙を棄て、顧みざりし如く佛國を放棄
したり其の埃及を失ひたるもの佛國が英國と提
携したる最後の史策なりとす英國は一千七百十
三年のウトレクト條約に依りて佛國人のニエ
ハウインドレント海上に能ける權利確定せられ
るに拘はらず同海よりすら佛國人を放逐せんと
企めり
佛國人の新奇を好むの性情と其政治的感情の永
續せざる傾向あると云り佛國人の國就中巴里社
會には概佛同盟の反對者少からし可しと雖も佛
國社會の多數は猶其の同盟の將策を有し信じて

が変更を望まず露伊同盟は寧ろ民間に氣受ける
能き方なれば及対派の運動能く其の喬木を動か
し得るや否やは疑はし

露伊同盟に依りて函館孰れが贏ち得たる所を
かば屢々論評に上りし所にし而かも截然たる
結果を得ざりき此の如き比較は甚だ測定し難き
ものにして要するに十ヶ氏及アダムスブルーク
氏の結論は政界上及經濟上其の當を得ず

露国は決して伊国より獨心に屈從せしめたる
ことなし伊国が較近十年間其の一千八百八十
一年に至るまでは政治上、一千八百九十年までは
經濟財政上牽制の最も強かりし獨心の勢威と脱

したるは疑ふ可からざる事候なればなり

教十億法の金、伊国より露国に轉送せらるるをり
と云ふに至りては事理に通せざるの甚しきゆゆ
たり券債の大平は曩に獨逸帝國和蘭等に在りた
る露国債券の整理に充てたるに過ぎず伊国人は
毫も之に就く事なく露国は一も新に金を受
けたることなきを以て寧ろ贏ち得たりと云ふ可
し

伊国より巨額の金は新設鐵道に對する公債の姿
及の伊国人の露国製造場工場及砒山に對する預
金の姿を以て露国に來れるものなり露国より獨
逸工場に送交したるは右定せざる所なればも新

事業の多くは露国に於て經營し居るもの有り
且其場合に於て露国を以て佛国に注文するより
も獨りて注文すること得策なるか如くせしめたる
るもの見小佛国人の流布り要するに幾億の資金
は佛国に之を借用する所なりしや疑はし佛
国人が露国政府に貸付くるに四厘の利息を以て
し露国民間の企業に對しては其注ぎ込めたる資
本の四厘の一は消滅せしむる處に去りたる如き
有様に貸付けたりとせんには佛国に之より更
に確固たる有益の利益方法なかりしや明きり
露国が佛国より買ふ所佛国が露国に賣ふ所に比
し其甚だしく時として四倍の少きを是ること

ありしは佛国人の屢々にする所の譴責を以て
其情態を改むること甚だ難し各國の條約に
締盟各國に同等の權利を與ふるの條項あり以上
は吾人亦佛国人に或特權を與ふることを得ざる
こと猶佛国人の吾人に之を與ふること能はざる
が如く其率たる氣候と田畑と人民の職業に因由
するもの如く天然の力の有り加之露国が毎
年佛国の貸付資本に對して支拂ふ所の利息三億
法の巨額に達すると思はれ總体の金利は常に露
国にあらざりし佛国にあらざること亦疑ふべし
あらざりし

露人の日本観

曾て東洋を漫遊觀察したる露国ノロウオエ
ウレミヤ新聞記者スイロミヤツニコフ氏日
露問題の畧々たゞに際し同紙上に「露西至と
日本」題す長文の論文を掲げたりしが倚
教電報は其の傍説露国人の意向を表明する
ものなりと報せり其に其の全文を譯載し以
て露人の日本観を紹介せん

極東は今亦三年前の如く各露国人の注意を惹く
に至り吾人甘滿州より撤兵すべしや否、符久
吾人の極東に對する干豫と極東代官職の設置と
共に新紀元起りたるや否、日本人果して出兵す

るを得るや否、極東不守は戦争運部を開始した
るや否吐弄の疑固は今や聖徳将軍の市井及客室
に於て人々相會する毎に話柄に上る所に一七世
人が極東地方に注意するの趣了りたるを証する
に足る由來極東地方のことたる夫の怪嚚に一七
事情に精通せざる聖徳将軍の官吏の度外視した
る所に一七留地の及至輩が其の需要と勢力の如
くを知るざる旅吹に及漸遠港邊の人民の爲めに
煩慮する至難の義諦を度外視するもの是れ此等
と一七悲観的の意向を起さしむる所以なり河人
と在れば聖徳将軍の及至は已に獨爲の術に巧に
一七獨り施政の權利を有すと自信し凡そ彼等の

手を得ず彼等の手に依らざれば行ふ所のもの
は皆悪しと一七且危険なりと古す是れ極東事件
に關し一七警報の喧傳する所以なり
或は信て政治上の矢錯を爲すことありも然れ
能くまじく之を思守を張すべからず滿州撤兵す
下しとする説の如き則ち其矢錯の一なり假令味
説有方の人に依りて言明せらるなりとすも事
情の變化したる以上味の宣言を一七決して有効
ならしむる可からず味は此き宣言は固より爲さ
ぬに如かば二策英國の台々然屬々埃及撤兵に
關して言明したるに徴するも凡そ國家たる中の
が一分時間たりとも其の將來爲さんとすること

に關して明確に言質を與ふること能はざるを証
すに足る坂人や國家元首の意にすり依らず
して其の政府を組織する人々の交送任免行ふ、
國に對するに於てをや

滿州が單に露國に對して新開地上の戦争を爲す
口實の一たるに過ぎざること固より疑たし即ち
て更人は斯かる戦争には疾人に留聲し居らざる
筈なり吾人苟も滿州に於て讓歩せんか次で起る
ものは蒙古問題ならん西藏問題ならん西伯汗問
題ならん高加索問題ならん芬蘭問題ならん吾人
に對して血を流さざる戦争を起すのに實は常に
多々あり今この廉に於て紙上忍ぶ所あるは幸

と謂ふ可し

誠に日本人の見地よりして其對露の干渉を説か
んば樺太千島滿州實滿州及朝鮮の東岸が事實上
何人にも屬せざりし日清の漢土が黑龍江により
巨済灣に至る間に於て悠々として漢業を営み一
露人の此に在らざりし時代は今を去ること幾久
しとす可し此に一七八七年出版の日本目録
本貿易別名日本諸島の歴史地理上の最近紀述と
題する書を編き青島、珠書や露國に歸化して露國
官吏と古ふる日本人にウイマン氏の親しむ様
圖してウイマン、ミルン氏の出版したるもの存
り此書と繕は較進歩十年間に東亞に起りたる

事件一月瞭然たるを該記者に曰く

亞細亞北東方面露國の版圖に歸せしより東洋に任ずる露國人は暴風に依りて堪察迦沿岸に漂流し來り日本の船舶を見たること屢々之あり同平嶋に於て救護したる日本人甲イルクツスラに送られたる者あり彼等は基督教に歸依して日本語教授の爲め航海學校に奉職し又或は永く同所に居せし貿易を営むたる者あり(ココツインギ氏の如き其一人存り)一千七百三十九年始めて日本沿岸に至りたるは海軍大尉ニパンベルク及びエリテンの二氏なり然れは彼等は日本人と交際すること能はざりき日

本人と實際貿易を開始したるは一千七百六十六年哥薩克中尉テヨルスイにして後航海副長オケイレゲン氏一千七百七十五年之を回復しゴラストキニン及セレソの二商人之を擴張し二商は松前嶋(北海道)に於て始めて日本人と相見たり

一千七百九十二年千眞近海に於て破船し救月間ヤラースクに任したる若干の日本人を其本國に送還するに當り海軍大尉ラツクスマン氏を以て其任に當らしめしが氏は同年キモル湾に越年し同所より所近の市府に特使を派し自己の到着したること告げ併せて航海の理由

を説明せしめ翌一千七百九十三年函館港に入
り進んて松前城に至りしに江戸より派遣せら
れたる日本の二人の武官之と近へしウクスマ
ン大尉に日本皇帝の満足に思召さるゝ敷旨を
傳へ保せし其行を中止せしむる訓令を傳へたり
然れども其事件に際して日本皇帝は毎年商品
登載の船一隻を長崎港に入ることと露国人に
允許したり

此後露国人は日本人と通商を削かざりし一千
八百五十年に至り一千八百七十四年同海軍少佐クル
ゼンスネルン氏グワイドフ及びワオストフの
西大尉并にゴロウラン及びバルド両少佐の統

率の下に企てた遠征に由りて日本人と交渉
したり

此東亞露欽に人民繁殖し文化普及し製造工業
起り露米商會が更に其歩を進めり遠く東亞に
業勢を擴張すに至りて西伯利亞地方の貿易
及航海は盛大を極め露國船が日本に熱帯地
方の産物を輸送するの時期到来せん云々

是れ今より八十年前日露干繁の前途に在りて想
像せし所也此八十年間に東亞の時局如何に
変化せしか請ふ之を追想せん

今より八十年前豫期したる如く露國の商船は
日本に亞細亞熱帯の産物を輸送せしむる及て其

軍の産物は日本の船舶にて沿海州に輸入せり、
、の奇觀を呈せり然れども露國に於ては一千八百
六十年浦塩港を起し日下其人に約三分あり沿海
の荒野に起りたる沿海州には一千八百九十七年
の調査に上りたる人に二十二万あり又一千八百七
十一年には樺太全島露國の版圖に歸し一千八百
九十五年には露國は日本に同じく遼東撤退の最後
の通牒を送り一千八百九十七年には露國庫須に
を占領したり、又一千八百六十年には露國軍
艦ボヤボニツク辨對馬を占領し露國の旗を立て
僅に英國提督ホーパ氏の強硬を主張にあり、
引下げたり遂に一千八百九十七年には吾人韓兵

を訓令せんが爲め訓令を官に朝鮮に派遣し銀行
を設置し財政顧問官を任命し且同年又グリニ
氏に韓廷より特許を授けり小たる森林採集事業
に着手したり
其の如く露國の不慮不撓暖々すとして東洋に武
歩を進むるも日本の和人も一と深く威節も起さ
めたり日本人は露國滿州を併呑したる後朝鮮
を蠶食し朝鮮征服の後には進んで日本を征服せ
ん露國が長崎に垂涎し箱館を露國化しアロンシ
タウ止科理店を築きたる由の爲然に非ずと
苟も日本は情勢に通曉する者に取りては日本新
聞の常に露國に對して暮々●の聲を挙ぐる所以の

このは露国の侵襲を恐るゝが爲め存ることを解
すに難からず獨り英米人の例の征得大帝の偽
遺訓を以てそのを流布し常に露国人の野心を起
るを視て日本人を以て露国に對し恐怖の念を起
さしむるの計をたず露国の行動を今日に於て彼得
大帝の如き人物を輩出するの恐れあるを以て此の
恐怖の念を起さしむるを積食せざるを約し又
對しヒール及びタシケントを積食せざるを約し又
又ギールスガナル及びバクトシカを占領せざるを
さし確保しを以て英人が固より之を信ぜざる
も其確保を約束せしむたり昔人は英人に對し
マルガ及びアフエルガンに對せず乃ち印度に對し

て約束を與へざる可からざりき今又日本に對す
るも其の如くにして朝鮮に對せず乃ち日本其者
に對しし約する所在が可からず然らば夫の一
千八百九十八年四月十三日交換の西、口、セン
の覚書中に

露西帝國政府は韓国に於ける日本の商業及
工業に關する企業の大に發達せしむること及同國
居留日本臣民の多數存ることを認むるを以て
日韓兩國間に於ける商業上及工業上の干渉の
發達を妨礙せざる可し
との條目を設けらるる可し
露西國は日本の朝鮮に於ける商業上の利益を

妨碍するにあらずして日本ニ支那領土に於て露
國臣民の商業の權利を實行するを妨碍すべ
かり

此以日本新聞に稀山大尉が滿州の探偵旅行より
歸りたる談話有りといふ掲ぐるものを一讀するに
同氏の衣服及行李の質素有りし爲め滿州旅行中
露人の注意を惹くこと少く其職を問はず、ある
は公然士官なりと答へ其參謀本部に奉職せざる
やと問はれたること一再にありざること露國官吏
が氏の視察旅行したる場所に於て氏の奉節に課
と注意せしむると思はれざること又一氏は冷爾賓
に於て七百人の日本人と十一軒の日本商店ある

を見たり冷爾賓には旅人を宿留せしめたる者十
二時以後に屋出づべき制規あり日本人の旅行に
對しては殊更猜疑の目を以て取扱ふの風ありと
云ふ一日日本新聞は之に所載し七日

稀山大尉が其の宿留したる家主人として露
國官吏に屋出を爲さしめざるに由りて視察上
甚だ不便なる間諜の嫌疑を免かるを得たり
は以て大尉の説得力の大なるを証するに足
る

と此の一句能く全日本人の思想を表明して餘ある
り大尉は到る處人に向て思ふに支那の苦力に對
してならん士官たることを明言せしむると云ふ是

此彼等を以て畏敬せしむるの如くあり而かも
ハ爾濱に於ては露国法律の保護の下に生
る同胞七百人中一人在る一家の主として露
警察を欺かしめたり是れ其職の爲め辱
を蒙るること能はざらざるに依りて疑はし日本
人は露国の警察露国の監獄を以て是れ
ものゝ如し而かも露国人たる余が長崎監獄を視
察せしとき其の甚を厭ふべき由りありと解す
能はざらざり日本人は露国人を恐怖するの餘り
露国旅行者に對して有りたる無禮を加へ撮影す
る士官を捕縛し露国水夫を殴打し露国の婦人子
女を侮辱して憚らざり日本人の狂暴憎悪憤怒の辱

動には自国の生存を夫も恐怖の念の及ばざらば
の如くして日本は今露国に對しては昔に
あり露国は彼等日本人の神話を破壊し
るなり
故に吾人は敢て日本と戦ふを恐るず且其の結果
の如何も明知しつゝ今日日本を辱むるの手段を講
せざる可からず
今より二年前は日本人に在る洋の若干の島嶼
に殖民すべきことを勸告したりしが其事たる當
時吾人を折可なりし由今已に曉し吾人は断つて
日本に朝鮮を奪ふ能はず之を畏れたりんには
彼等が旅吹口より 神楽港に通ずる連絡線も亦断

予運部才一着歩たるやり山はたり老人中朝鮮
ノ羊を日本に供ふる能はず是小日本を以て穀
物多穰の地に軍力を發達せしむるの方途を得せ
し如他の一羊をも征服するの便を得せしむるや
ければなり然山は老人は又決して日本を襲ふ中
要なし及て吾人は是の貧弱なれば亦かの企業心
勁々たる國民と將來益々親密の交際を為すの準備
を先さしむる可からず余は曾て日本に浸透した
る際露國が曾て致同と耳甚と干戈相見、たゞ後
本國の獨立を保護したり如く米國又は獨一の露
食に對し一日日本人の獨立を保護するべき時期の到
来するの近きにあらんことを証明したるに日本

は若笑したりき吾れ知らん土耳其人の維新域下
に於て若笑したることを
北韓の森林伐採事業ノに關して惜哉今寧に日本新
聞の報導に依りて判断すの外なし但し其事情
の如何に關らず予は鴨綠江の採伐事業の爲めに
は辨護せざるを得ず予は一千八百九十八年十一
月同所を視察したる際自ら同事業の急務且有利
なることを主張したり會社が一千八百九十九年
に其事業に着手せりて一千九百三年に着手し
たりは惜不しと爲す
予は當時通信を以て安東縣の北韓経営上息詰に
附りてからざるを主張したるに世上殆ど耳を飲

とる者たかりしが今十年意見の漸く実行に近か
んとすことを見れば頗々快とす露国は朝鮮に對し提
来の支那の同国に對する地位を在るること必要
にして且つ必ず之を在めざる可からざる露国人中
朝鮮に於ける日本人の商工業と妨害すべからざる
こと猶浦項港、^海 浣賓旅順に等しに於て妨害を加
へざるか如くすべし當然有るも之と同時に露
国も亦日本人の朝鮮又は何れの国をたすを問はず
露国臣民の商工業の新作を妨害するも容忍すべ
し然らず日本人たるもの宜く之を記憶すべく若人
は恐るゝ所なく勇往邁進すべしとの事
若し天小露国人の支那人に對する同情に至りて

三百年來境を接して相争はざるか一平を以て支
那人が深く露国人を愛するの徴ありと云ふ露国
人は其愛情に酬はるに支那に對し特別に盡すべ
き任務ありと云ふ由あり也旅順に力を欲し、ア
ラガウエシチエンスラの砲撃滿州征討事件が支
那人をして露国人の支那人に對し愛情を懐抱
すことを疑はしめたるの計ならざる支那人の露国に
對して好情を有せざることには露国に同情を表し
たる首名が政治家李鴻章の日清戦争前韓國首相
に送りたるところの書に申りて之を徴するに足
る

とて一千八百七十九年十月二十三日附にて李

馮章の韓岡首相某に送りたる翻譯を抄録し不
、之後曰く
清韓人の竟鬻は今昔に替ふことなし若人極
東に於ては夫れ一之支那にも朝鮮にも頼る可から
ず故等の利益は我國の利益と衝突す我と利害を
同ふするの國唯一あり仰國是の行故に我露國の
東洋に於ける一大問題は其の結果の有効なる露
仰日盟の擴張振興を謀るにあり

日露文牒事件

嘗て倫敦電報に露國政府の意圖を表示したり
と云つるノオウオエ、ウレミヤの社説は昨年十
二月十二日の同紙上にあり、同社説は日露議
判と題し先づ日露文牒に關し各國執中美國
新聞に載する極東發の電報は日露干渉益々切
迫して日本は已に露國に最後の通牒を送り返
答の期日を定め日本は能く要す強迫し
露國は謝儀し讓歩し覆答に若し許して徒に時日
を遷延せんことさしお見小勉むと云ふと來て
是小國より捏造の虚報の行と駁し謂て日く
露國は如何なる困難の場合に際しても大國たる

禮度を保ち其の危迫する敵の如何に恐るべきも
屈服的態度を執るものにあらざれば日本にては能
く決事情を知りて以て我敵同か日本臣民の敵愾
心を煽起せんとして如何に熱心に極力盡瘁する
に拘らず日本政府より其の要諦に對する覆答を得ん
ざる送所し来らず其の要諦に對する覆答を得ん
が為め期日を定めたる如きことなく且つ要諦を
のちのすらすら提出せられず日露間の交渉談判は未
だ終局せず今猶依然各種の問題を争ひ西国間に
意見と交換しつつあるも事情は決してウリケマ
タムと送る場合にも破裂の場合にも至らざれば未
亦之れをがらんことを期せざるべからず

借交渉談判の真相に至りては外国新聞の之に關
する報導事實を照り時として全く想像的報導に
過ぎざることをあり例せば外国新聞中日露談判の
要諦は滿州問題にありて日本は同地方に於ける
自国の利益を所衛せんと欲して露国として滿州
に關する幾多の義務を負はしめんことを主張す
ると云ふ、其の中日露談判は滿州を主題とするを以
て同州に關しては露清間に於ての外交交渉は得
ざるのみ、斯く云つばとる滿州に關する問題に對
して日露兩國間に交渉審議するの餘地なしと云ふ
にあらざれば之を名すれば單に滿州が全く日本

の勢力範囲外にあり日本は貿易経済的干渉の外
同地方に關し一切利害の干渉を有せずとの事
實確然規定すべし目的を以てすべし、
事たる極東に於ける列國の干渉を確定するとの
在るを以て公武上是の如き事實と規定するは無
希望ありきことなり

日露談判の主要たるものは無待朝鮮問題あり河
人と在れば日露の利益は同國に於て實際密接に
相接觸すべしなり、朝鮮事件に關する最後の日
露依約に於て露國は日本の經濟上の若干の特權
を是認したりと密土條に於ては日露の朝鮮に於
ける兩國同權の主義を規定したるものにして以

の軍事上及政治上に於ける同權は將來亦決して
破らるべからず、吾人は朝鮮に於ける經濟的利益
の範圍に於て日本に一層多大の權利あること
を述べし處に外國新聞の言ふ如く朝鮮の分割を
企つべし露國の極東に於ける政治上の地位に重
大なる損害を及ぼしては爲し能はずること
たり、露國は北韓に優越を有するも之の如くは
は朝鮮の隣地と之と接壤する滿州に於ける露國
の利益を確保するに於て猶不免分なり若し南韓
を以て日本に譲りたる人は日本は朝鮮海峡の
利海權を握り隨て我南塩港と旅順港間の交通は
遮断せられん

然るに朝鮮に於ける日露の利害を調和すべしこと
は假令乞土の上の手續を履かざれば行はずと命
割方人とて実行し得らざるべきこと分前存り此理
由に基きし日露談判が期待すべし結果を見ずに至
らんこと即ち是に在り平洋沿岸に於ける日露兩國
の平和的の明地通の事業を始末すべし兩國相互の
誤解の局を強ぶに多らんこと期して待たばし

三国干渉の當時

(及び日本の五脚地)

倫敦タイムズの東京通信員は十月十二日所を以
てタイムズに極東問題に干渉する長篇の通信を送
り而してタイムズは十月二十四日の紙上に之
を掲載したるが通信員は欧州に於ける諸國の協
解に於て痛切に之を弁駁し以て日本の真意を明
にしたり其の第一點として「先づ誤謬を妨ぐに
於て要あり」といひ日く

日本が明治廿八年獨逸露三国の干渉を受け違
東半島を還附すに當り欧州の諸國多くは日
本が此の時を以て滿州の才土之地をも外國に

劉謙もさうの誓約を取り違ひたりしを答めて
謂、らるる當時之ハあらば必ず永く滿州の紛糾
を断つと握らんと何んぞ知らん日本は當時
正しく此の誓約を得んと計りしを獨り之ハ
たらず奉天府及大孤山を由外國貿易の爲めに
開放せんことを要求せしなり然りと案露國は
之を以て已に反抗するの策をたしし断然互對
し争ひて北京の御台使又露國に加租し日本
に忠告を却せし曰く日本は強たせば必ず露國
の怒に觸れんと當時日本は露佛蘭三國と相争
つたに力カなく且又英國米國と共に日本を
抑へんと背せたりしかば思ふて途末半焉を還

附し又此の情おと由推察したるなり故に日本
が先見の明なかりしを答ふるは語れり唯々爾
時己れを即くするの友を見出し餘はさりしなり
此年日本人の大多数は之を知らず云々

通信員は更に「第三歐洲人が日本の露國の滿州欲
有に反對する所以は己れ自ら之を欲有せんと欲
ふに耳りととの憂を兼て而して日本が之れに反對
するカ現因は(甲)朝鮮に恐る(乙)清國に恐る、に
あり朝鮮は日本に取つて兵要上及經濟上露國の脅
嚇を許さず而して清國に恐る、ゆゑは露國が滿
州人を養成して大陸軍を興し其の侵略主義を逞
ふし茲に白人を將校とする所謂華人志の東らん

ことを恐ら、ものたり政州には日本人、清国人
と率のて漢人患をたすは危むある小は業人患は
露国人が満州人と率せる漢人患にありとて鮮に
之を叙論せり

夕イの不快翌日(十一月二十三日)の社説に於て之
を論じて時局の變遷は如何に日本人の忍耐力を
抑へ居るが如何か、少社帝國たる日本は能く之を
忍ぶは強ど大國の社はざる所に由ず、商工業は爲
めに蒸騰不振に陥るも精能く之を忍ぶ暗雲は年
重く其頭上を掩ひ然りと果て安りに干戈に新へ
ず相當の互譲を爲すを辭せざらんとす愛國心極
めて盛在ると共に事に處すること亦實際的なり

以率や英國の識者能皆之を詳しすと説き日本の
要ならず所の至當なるを説きて曰く

我通信員の説くが如く露國が朝鮮を欲有する
は日本の門戸を塞ぐものなりと露國が滿州及
朝鮮を欲有し以て清國に臨むに於ては永久
に日本の立場を遊新するものなり露國の挑戦
主義の新聞紙ノークイ、クイイは乃曰く日本人
の朝鮮に移住するは宜しと制限を加ふしと
極東地帯を開く者は日本人が露國の朝鮮に於
ける武裝的干渉に反對する大理由を首肯せん
日本と朝鮮とは商工業上相依るの國なり露國
が滿州に特許を得る鐵道を敷きたるは政治上

如何なる大勳譽ありしかば日本列国と共に之を
知れり而して露国が森林伐截に籍口として鴨綠江
流域に手を下し龍巖浦に經營するに至りては日
本亦黙視せずはざるなり日本は已に明治二十
八年に於て瀋州を割讓せざるの約を清国に求め
んとし一に而かも欽州三火國の爲めに妨げられし
なり欽州人は日本が欲し膨脹の念盛んたるを云
ふも是れ事情を解せざるものなり若し所謂英人
意ありとせば我通信員の云ふ如く之れ日本の
異國味にあらわしき寧ろ露国の南侵して新に得
たる難地を去りて起らん日本は商業の平和と最
好利益とするを乞ふなり

露国の對清政策

ノールウオ工、ウレミヤは日俄二十日の紙上に露
国の對清政策を論じて清国には露国に通じて直
に瀋州を還附せしめ清国分割の端を妨ぐ可しと
主張する肅親王、張之洞の一派は清国の分割を
恐るゝありし成るべく露国と俄に和すると唱へ
る李鴻章の一派あり西太后は西者の説を取捨する
に躊躇し清国の態度頗る困難なりと云ふ即ち
之を決するの困難なるは財政の困窮と兵力の
弱きにありと云ふ日露戦争の際露国の殊るべき、
政策を論じては人、
日露干戈を交はると降して清国の瀋州に於て

る敵對軍神は吾人を一に後顧の患あらむ可し
故に情同軍隊として一に吾人の駐兵区域に於て
一に對して苟も敵對軍神を表れに於ては吾人
直に之に手膺を攻撃を加へざる可からざる
彼の直隸省に於て同國人を却採り漸次滿州に
侵入せんとす。恐ある馬至民部下の無規律な
る員合の兵に對するや善き懲戒たるべし云々

日露孰れが勝つ

スベクテローターは自ら之に對して曰く一言に
て答へ難し日本政府は敏慧の士に富めば必勝の
見込ありあらば必ず其の計上に揚ぐたる通信に
ば日本陸軍は外國人の觀察する如くに陸軍から
ずといひて通信員は其理由を示し今日日本海軍
のことに報導も来りて其の或部中は一軍
の鉄關的價值を供するものにして伴はず要するに
陸海軍共に形迹大方に其戦關力を失うべしと云
へり其れも一に然るや吾人を知らず人等は開人
曰く果して然らば北清を變へ際日本軍が列國軍

中にありし日覚よりき初作を百せしは印人死や
と之に對しては當時の日本軍は日本陸軍の逞良
ありしとの答弁を告し得ざるにあらずとあり免
に角我輩は印北とも断言すること能はず唯之美
國人は今度日本軍の戦闘力を激賞するものな
り故に我輩は、ソリ、ノーマン氏の意見を以
て正を得たるものと思われ果して然らば日本故
府は中心戦を欲せざるは殆ど疑ふ可からざと案
も日本には種々戦を欲せしめあれば政府は嫌や
たがうも結局戦はするにせざるに至るべきを
保せず

又瑞会に當りて是國人中日陸海軍の連
連瑞

古期よりその古から下きも露國の陸海軍は種々
の欠缺ありは疑ふべからず露國の陸海軍悉く精
銳にあらざり又腐敗の行き、あるも幸矣なり即ち
其の戦闘力を較べし大なるものあらん然れば
露國は無限の富と無限の人とを有す結局に於て
之は勝敗を定めん露國は始め敗る、と深く憂へ
せず日本は即ち然らざる存り即ち日本海軍は露
國海軍を殄滅し得るとするに至るに露國の強硬な
る旅順口及滿州の一部を隔て、を得るが露國は
正に利益を鉄道あれば陸軍を派遣すこと得人
日本は如何にして之を拒絶し得るか決断的
に之を許はざるも我輩は日本は如何にして露國

の陸軍を喰止め得るかと疑ふと更に美国の地際
に於ける地位を論じり

英国の地位

英国若しは佛国が同盟條約に於て日本若しは
露國が露國の敵を引受くるにあらば人び戦争
に加はるるを要せざるは何人も知る所なり又ハク
テ一タ一曰く清國若し日本に加担せば佛国は之
を以て二国以上の敵と見做すか清國の日本に加
るは決して無いと云ふ心からず其の場合に當り
佛國は露國は露國は必らず佛國と同盟を絶て三國
同盟とハ露國に佛國を助けざるも脅さる佛國の地
位や若し露國は露國は露國と同盟して以て獨一の政

撃に當らるる露國は恐しと境界を相拂するを以
て同盟として美国より七有力なりと垂て其の端
合に當りては美国若し佛國と同盟するを肯せば
佛國は露國と相絶たん然も此佛國若し露
國と絶つるを危険とせば必らず露國を助けし海陸
日本と露國果して然らば美国亦加りて戦はざる
べからず身は着し之を辞せんと欲せば佛國と同
盟して之を助け補ふと戦はざる心からず其の事
や亦決して好まらざるは蓋し英国は其の
如き窮境に陥るべくし此を憚ん然も此既に
日美同盟より日美同盟に及対したる所以に至り

て漸く將に駭あらんことを云々

露將の満州併有論

満州併有の可否得失は目下露國政論家の論議する所にして專ら財政の上より論ずるものは面積政州全土を凌ぐの廣漠たる満州を露國に併有するは財政上非常の損失を蒙り困難を歸するべしに國家にとりては百害ありて一利百きを以て満州北部の露國と境防備に必要なる部分のみを領有し南部満州は支那に還付すべしと説くも專ら駁論上より立論する武新派は全く之と相反し満州全土は必ず露國の領有を爲さざるべからずと論断す近次ウオウエ、ウレミヤ紙上にゲリシカなる人經濟上の點より満州南部は謀欲にダ

ルニ一等の租借地を除く外支那に還所すことを得
策とすとの論を掲げたに曾て北清年変の際露
国大^平洋艦隊一方の司令官として露艦を指揮操縦
したる海軍中將ウエシヨシオ氏満州併有の利
益と歎す一論を同紙に寄せしゲリンガ氏の説
を駁し極力満州併有の得策否ふことを論じり其
要に曰く

我部満州の露国にとりて歎る重大なる価値ある
所以は予の度も在定とする所在も之が保金
為め且つは巨資の東洋に流出するに防ぎ財政上
の安固を確保すとの策略の爲め南部満州を以て
支那に還所すべしとの説は断つて同意すること

能はざる有り余の見所を以てせば南部満州の
併有は吾人に利益を與ふるの外不利を及ぼすこと
と在し吾人之を併有したるんには鐵道に如き不
便利なる境界線を以て我國境とせしめて天然の
の境界線を以て國境とし且つ之を防衛が爲めト
多量の兵力を要せざるが故に便宜有るべし我國
境中遼東湾口の最も殷盛なる貿易地帯に鐵道
の遼河の左岸に沿ひ國境より少くはかりの土地
を過して至り松花江の支流遼河に沿ひ進んば流
々として近くばかりずる大河松花江に沿ふべし
綽爾河の松花江に合流する所に至り我國境は同
支流に沿ふる遼河大興安嶺に達すべし次は遼河に

流のグイルノール湖を過ぎウレシエン河とウラ
イノール湖流岸に流ハシエウエルト市に至りて
盤田卒と聯絡すハシ

加也たらハ興安嶺外には夫の廣漠を去る戈登の沙
溪連りて我欲て支那の地をより分障する事也

巨万の兵に優る下し吾人は常に北部滿州の地を
欲有し左らんには我が國境と我鐵道防備の爲也

常に戦慄せざるを得ざるハしと皇も滿州金土を
欲有するに於ては其憂を深くこと著しかりし

若し夫れ經濟上の危陽に至りては一管にハハに
て同岸の收入はジャンクの關稅約百五十万留ある

ハと一管と一言するを以て是れハ一人一人全く之

を欲有したらんには外國國稅の巨額の收入亦老

人の手に歸す且つ吾人滿州を欲有するらんには

繁盛の市府に稅を課し外國輸ハ貨物より關稅を

徵収すること我輩尙者の植民にあらん加南新滿

州は吾が採掘せざる炭坑金坑に富まり云也

是れ通常政奉家の言にありハハ極東太守アレ

キセーハと親善在る一海軍將校の言在るとも讀

者の深く注目する所あり

露人の樞東問題

樞東問題は日下露人間の一話極に在り殆どこと
下りが近着のノオウ不正、ウレシキヤに身席上に於て
樞東より露聖彼得堡に歸りたるボウガン氏の
話下りとして記する所に依るに氏は曰く

予は露欲重細重の奥より来り予の奥に来り
たるは新聞の報に依るに當地方人士の懸望を
支託すと云へるに怪むべき怯懦の氣風に對し建
議を乞ふ人も為めにしる余の説は獨り西伯利
亞の爲めなり打たらば全露國民に對する一大事
伴の爲めなり老人は滿を厭退すやまや居や是
れなり

下クガン氏は之を言のたりし四邊を環視したる
に望み歎として聲をかりしは亦氏は一擧聲一書
りて曰く

新いそ撤退すべからば余は西伯利亜に任す
こと十年限なく同地を漫遊し滿州に漫遊す
ること二年、旅吹に、日本、支那に中赴き同
地方の事情に精通する人々と談を交へ、諸局平
の説は断つて撤退すべからばと云ふは一決し
たり

座中曰ふ者あり曰く然らば我露國は滿州の爲め
二三縣を軍と戦ふも可なりとすその意なきか
ボ氏曰く在々全人然らば吾人の滿州を撤退せざ

るは戦を避ける人が爲めのみ余の見し所を以て
せば戦争は例應避くべからず即ち之を避く
る唯一の方法は吾人滿州に止まるにあるゆへ
吾人爲りて歩を退かんが日卒々支那を吾人を
襲はん然らば吾人勢はさすを得ざるに
至らん

ボ氏更に漫遊日記を繕き謂て曰く
諸君既に實状妙なりと核せし若し俄或に拘泥せ
ば實際に着目したらんには戦争は既に業に宣
告せられたる感あり吾人も隣邦業を種も吾人の
爲めに都合宜しかうまう列國の干渉に由りん
風に交戦しつゝあるものなり吾人今や花々

いさ成りたる時に當り老人甘んじて新
かゝる勝利の結果を放棄して可なり也吾老人
多年巨費を費したるの勞と地を棄てし可なり也
右の同題起れり、余は比の同題の起るを以て
甚だ奇怪と在りしなり旅吹は巨額に伴へり
此の羊外交的の羊戦争的の事業は寧ろ着手せざ
りしと可なりとすか……

聽衆の味に無着着手せしむりしと可なりとす
以者ありけしはボ氏曰く
郷井は米田より来れりワングム氏の興味ある
書信に一顧をせしむりしは獨り孫邦が西より露
国の破壊を唱道し日本人が東より干戈を交へ

んとす時の方より遠き合衆國に能く亦露人を
亞細亞より逐作せんとの議あり、諸君は是
れ決して戲談にあらず、此米共衆國の發達也
若し、米田は美國と同盟して曾て歐洲が新世
界に對して爲したると同様の事も舊世界に對
して爲さんと企つ今より四百年前哲人種が
福音と剣とを以て荒々たる大西洋を横たり大
の島を奪けたる米田上人を襲ひたる如く今又
荒々たる太平洋を越へて米田の破壊力は半規
半規の亞細亞を襲はんとす強慾熾くなき英米
人は已に亞細亞の南部を占め乍今我帝國の
最大隣邦西伯利亞に手を染めんとす彼等は云

其其及の支那に勢力を 扶植し米國は太平洋
の諸島を占領す此の文明國の急劇下は膨脹を
世人に痛痒を及ぼさず錢國の運命の増長に
関せずとするは、 諸君よ余は然らずと思ふに
り余は露國は今や及急存亡の時に見えりと思惟
す、

ボクダシ此業を嚆矢し年々叩き日く
世界争奪の不振は未だ終局せず然れども日下膨
脹しつゝ、ある國々の吾人に対しして深く敵愾の
氣を會ふことは知らず親からず請ふ試にせよ
同世人吾人の世政を以て國に對しては嫌悪せらる
所のものは河を池を以て支那と同トく欲すの意大

たると膨脹を多す、併に自在の氣風、絶無之
たり、美利は臨時日の出の國と提攜す、 該二國
は吾人に敵對するに必らず日本と同盟を以て
す是れ身は自國の危険を前知するに依りて或
は東洋すりの起弊を免かんとするに依りて
るん黃毛人種は先鋒日本は大陸に足を踏み入
る朝鮮を侵し滿州を襲食し支那を襲ふん其に
自國の根據を堅め自哲人種峻拒の策を運さん
とす米國人が亞細亞に踏み入るに先だつて
蒙在人の反抗に打勝たせよ、よからず日本と戦
ふべきが戦ふ可かりしに付ては我國に議
議暮々たり然れども余の見よ所に、

に至るやむべしの時日甚だ多からざるやしこ儀が
るなり教通日七途在らんには甚だ弱在らん
間の口デックの外に恰も水力又は風力の如く
一種の法に之を組織する天然の鐵的デック珠
の活世界にあつること諸君の明知する所と在ら
ん黒雲暗渡と一いつ天カ一方に起るときは吾人
は暴風雨来ると確言せん暴風雨或は起らざり
て黒雲の散らすことあつても知こやからむと委
七其起るに滞りて飲く之を故々の策を盡す是
小智者の所為なり暴風雨豈能く之を避くべき
吾人や何時暴風の吾人と襲ふべきかは豈能く
吾人の知る所と在らんや滿州撤退は甚だ言ひ易

きこと古小ども撤退は必ず戦争を避くるをを
味するやの如くあらざるは吾人の確信する所と
り支那は常々日本に對して讓歩したるに非ずや亦か
と日本は支那を襲ひたり吾人の撤退は必ず軟弱の
結果と看做さばん吾人が今双肩に支ふる所の重負は
吾人の一たび撤退すると共に吾人を壓するに至らん讓歩はど
政治方針を激すよのあらざる吾人一たび滿州より撤退した
り人には日本支那は果して意を屈し穩に在りて永遠の平和
到來すと思ふか嗚呼是れ何んたる驚愕哉二國の見指
す所尺土寸地に在らざりて極東全体たる太平洋沿岸を
伴り戰爭は之を飲ぶや人且つ厭ゆざるやからずと果む
若くは強辭人の言ひざるに於ては已にたぬ得たる地位に踞り留

ヨリて不利の情態より有利の情態にナリて然に應ずるを得難し

露人の極東回次(三)

時に坐中よりボクゲン君と呼ぶ者ありボクゲン
氏其方を歎かれ

ボクゲン君は清の余に一言するを評せ……
……されど清事は満州の手に歸するに非らず
や吾人は衝突の云々範圍を擴張するの權利あ
りや否や

ボクゲン氏答へし曰く

吾人は常に權利を有するの所ならず義弊を
有す吾人の義務は軍物の振元を觀察するに
り諸君も知らる、如く外交家と云と異らざ

たれば巧に其意を掩ふが為なりと云ふに
ありずや然し氏吾人は商人として何為か他言
を吐くの高ありん抑も現時の葛藤の原因たる
吾人が極東に存在を伴つべきか將た伴つ可か
のざらかにあることを知らざる可からず吾人
は之々然の若政界の主眼を認識して之々然
とが実行を期せざらざらば
又問ふ者あり曰く

されば満州は柔しき實際吾人に必要なりや
無常必要なり許し彼の地方に往て見らば又
は單に彼の地方より柔しき通信を墾墾せらば
は我流海州、太平洋沿岸全伴、東部を佔領す

全侍が今己に日清海關に倣ふこと、皆七名部分
の十丈に汲引せらるゝ、如かし該地方や露國を
おとすこと歎る遠く露國と密接するに不傳
利に、一と東洋に倣ふ、經濟上の統上地階に該地
岸は露色の、一と今に至る才也、吾人未だ此
の露色を摩摽し去る能はず、沿海州や里龍川の
如き支那より割取せらるること、日清海關に薩哈
賓の日本の版圖を脱したること、亦近來のこと
なり、其の如何に利にありて、極の緊要なる地
方は、今福世界の最中、極大なる家族たる露國を
慕ふこと、何なり支那は能く之を知り未だ曾ん
自國領土の割取せらるることを忘るること、在

し、其の割取せらるる地、亦も重視すること、猶此
鶏が走り去りたる、鶏を惜むか、如し、試に思へ、支那
は夫の彈丸地たる、固爾、此の爲め、一十八百
八十年、吾人と平方と交へんとし、たるとあらば、や
又思へ、沿海州の漸く吾人に讓與せらるる、吾人は支
那の以、露國に際にあらずや、遂に心理的已を、支
那の地位に立ん、彼に、心腹方の人となり、我に、
該地方には僅に、吾國方あり、能く、彼小吾人を、東
洋より、驅逐せしむ、吾人、其を夢想するも、豈に、得ん、
んや、吾人、滿州より、撤退せんか、支那の地位は、益々
強固となりし、吾人の地位は、微弱となり、日清海
關に、一と強盛となり、吾人、其に、彼等が、吾人に、向

て願迫を加へんとすること昨々予として大を見
るより明たしにありや而して反扶の度弱き
程登進愈々甚しからん余をして其の威を控か
しめたるものほ獨り余の實地視察カテ在らず東
洋の宗統に臨み東洋に漫遊し東洋に奉職して我
隣邦甚色人の果して如何なる人哉右もやを日
朝鮮は日清國の葛藤の因なること已に二千年
の久しきにありおや日本人は一たびおん大
陸へ侵撃したり不して之を好むた支那人に討
つて汝并カ嶺峒は今や轉じて老人に移りたるの
お英人の大陸に據るんと欲したる爲め英件間に

直るの大戦争ありたるにあらばや日本人として
大陸に根據をたむるの不可能なるを憚るゝむら
には猶少からざる時日を要するや中知るべからず
諸君の知らる如く日本問題に決して一滿州問
題にありざらん總て太平洋に於ける露國に干す
る一問題あり老人身は東部亞細亞を專欲す
るを欲せざらんが日本人は已に我國との特殊の
國境をいんらつたに劃定したり苟も之を欲
せんとせば我者らに限りの全力を盡して我北海
を防禦せざる可からず

露人の極東問題(由)

ボクが代意氣軒昂謂て曰く

要するに滿州は稀我物なり諸君は能く其の事
實の重んずる意味を解するが、滿州は我國兵
に比し ~~大~~ せり小安全なる策戦振據地と一其
前而には要害固堅の砲台あり我海軍亦強く其
に其の精銳を築めたり吾人若し今退却せば數
年の後遊人可かりざる戦卒に降して再び滿州
を占領せざるを得ざるやしかば之を占領す
るには若くは慘憺たる鮮血の流を以てせざるべ
からず其の砲台や今や我物なりと其時に及
んでは包圍攻撃して之を陥れざるべからず試
に諸君に問はん吾人か今甘んじて斯かる有利
の地位を棄つるの預安人にかある是れ恰も將

綦の歩を棄て、金を取らるゝに等しきや打、
今や我政策の運ぶべき力の二あるの行即ち我
は能く至り強硬の政策を執り敵を一一歩も
も進めしめざるが然らば小は全く我政略を放
棄するにあらずの行今や吾人は戦卒の起らんて
すに舞臺に優執の地位をば諸敵の利益皆我
方に与り唯一の不利は吾人が猶極東に於て比
較的微弱なるの一軍の行陸軍と海軍と未だ威
風凛々敵を厭するの程に至らざる只其の一軍
敵として好機を得ずしと為さしむるの行余の
見所として今日の暮々に答ふに唯一の有効
なる答は漸次陸海軍を擴張するにあるの行也

人若し酒州に三十万の純銀を備へ、旅順に二十
隻の艦隊を返べたうんには日本人の感情全く
一変し喧嘩止まざるの列国も緘然せん彼等は
今や狐疑躊躇の間にあり戦ふ身は勝たんとわ
る思を懐けり今や實に彼我一般の幸福の爲め
此の疑國を想ふ水解するべき時期にあり今や交
渉談判の片やん好結果を遂げ得べしと思ふは
蓋し誤りなり恰も將臺に降りしかば無言に
して指刀をたて堂々カ駒を走らせしが配置を固然
たふすとは雄策の最上策あり各方向に敵あり
日邊勢在る兵力を配置するは勝を得るの秘訣
なりとする奈翁の跡踏に及りし若人は常に不

免命の兵力を連むること過さず其戦卒を
一人はアムル、テキンの役に徴し之を知る
に難からざる

少中尉の者あり

さ小とボクダシ君は兵力を養ふことノ至
難なるを忘るるにあらざや

よ云のけ小はボクダシ氏辭に應じ曰く、
余は決しん兵をたふしにあらざり巨費を要す
べしと小と兵費を駐此するの極めを必要とする
地方に之を配置せざるの結果如何を忘る、は
之小室に愚の至りなり必要の費用を乏しきは
時こして失敗の基たること余商人の言としん

信ぜらるる今日無費を惜まらば廣漠たる土地
を矢の數千年間苦心經營して自得たる莫大の
利益を失はらん

極東に於ける日本の地位

倫敦新聞云ニシテ、ポストは極東の財源を親
掌して日本の地位は正しく危の如しと説きたり
其意蓋し日露問題に逐々極東の航路を以て永遠
の平和を期すべからざるを示さんと試みるもの
にらん

朝鮮は日本の特別利益ある國といへる永く
也と保ち如くなる事情あるとも其一部令をも
外國執中掌握に歸せしむべからず日本は之を
絶対的緊要の事とす其の把握とすことこ
ろにあり

第一 日本國の安全と保ち并に他の政治上

の事由を考へるに當り

第二 日本が朝鮮に於ける商工業の利益他
同に卓越し一も遠く世に及ぶもの存しとす
るに發す

此等の二點は日英同盟條約第一條に於て明白
に之を表明せり日本は朝鮮問題に干しては自
ら此等の事を為すの權利ありと存すもの存り
満州 日本は満州を露國の永久に欲に委交す
ること能はず其の理由を考へし

第一 甲 満州問題に朝鮮問題と貫聯あり日
本は朝鮮半島に於ける政治的にして正當に
る權利及他國に超越すべし利益を妨礙堅確

たらしむるに於て断じて満州を露國の掌握
に委交する能はざる存り

(乙) 朝鮮を別問題として見るも日本が國際を
常任危迫するもの存らざらんも日本に於
て必要なり露國若し永遠満州を占領すに
至らば永遠日本が國際を脅威す

日本の其の地位を創証すれば露國英領印支に
あり英國政府の所定の防備を全からしめんが
ためには富強を急にする能はざるを知之もの
は日本の其の地位を解せん日本人は自ら其の
如く之を見ざる存り

第二 日本は満州に現行條約上の^{權利}利益を有す

水戸商人の権利を保有せざる可からず其の特
来は商人の之を措き現在既に日本の函州貿易は
全貿易の大幹命を在るものなり

第三 門戸開放と機密と平等とは商人の心と
を維持するに必要とす若し露国の滿州を左欲
するに許任すれば其の光に期すべからざる可
り

第四 日本は列國中最も清帝國を保全自主を
維持するに自ら誓ふものなり

第五 若し露國が其の河邊と古く嚴肅に宣言
したる所を破棄し去るに許任せば清國人の眼
中に於て日本の威信は全く元かん

第五 莫に自らは英米西國均しく清國人に
對する威信を保つに却るものなり

日露開戦前ノ戦局の

倚教タイムス曰十二月二十四日及一月十五日の
函紙上に極東の軍事局面を評して曰く軍事專家
の論之を掲載せり外人の觀察として又一種の演
あるを信ず唯々邦人が未だ此等の篇を擧げざ
るに於て戦局の如何も固交破裂の後数日を以て
わして我軍の敵の大艦少くとも七隻を以て戦
闘力を失し若干隻を以て大損害を負はしめ又艦
上我陸軍の寡かうざる部隊を以て仁川に上陸せ
しめたるは論者に在ても亦或は軍の豫想外に出
でたるを異とするものあらん戦事初期敵の戦
略を誤まり柔懦成す無きと我軍の大計を打棄し

之を所ふの果敢度達たるとは其の強果ありし
めたる有り獨一の兵學家ヲオシ、ゲルブルツ將軍
曰く人戦に決意し若し人は敵軍の戦心に決意
したるを確信すに至るとは軍事上より考へん
戦の利我にあるを信ずれば速に戦を闘人々、断
つて政治の上を考へん自ら危疑し道徳上より考へ
て自ら躊躇することあるやがらざる戦卒の如き大
千洋に旅して老澄心深けんす、決意の退失をたす
口突之より言へば無しと其意既あり
前清文二十月十日先づ叙して曰く日露兩國は
極東に於て科學技術の最近結果を其戦に在り艦
隊を存へ其の相戦の日は我軍軍海を以て立つ

國民に長大利益を與へん近世の三大海戦はリッ
ヤ(澳伊)黃海(日清)サンチヤゴ(米西)ハ一と海軍將校
及び海軍造船技師に多々の刺戟を與へたり日露
の艦隊既に其の如きと旅して其の會戦は必ず我軍
を以て大に證明せしむる所あるも疑はらずと
進んで細く日露海軍を比較して曰く露國艦隊は
日本艦隊と相反して艦型式の同一を欠き装甲力
重量及防護劣り、艦艇修繕の備設劣り、訓練紀
律劣り、故に開戦の日、露國艦隊が艦隊相手
とを避けて直隷湾に艦隊を引揚げたりとの報に
接するも海軍軍事に通ずるものは憂えとを大に
思議とせざるハし若し艦隊相戦は、假令局部の

勝利を収むるも其の艦船を修繕する所在れば在
り又日本は海軍に要する艦船に露國艦隊あり限
りは東海に陸軍を上陸せしむる能はざるか故に
決勝打撃を加ふるに至る事ハ長交通船を保持
し朝鮮の東海岸に兵を揚ぐるハ已むを得ざる
に至るなり
又而陸軍を比較しれば日本軍隊ハ新式銃
は日清戦役在り北清事件に之を賦するを得たる
も亦北京の一国と戦はず故に露國軍の之を海
軍に奪はる事少き見相合る然れ其歩兵の攻撃隊
形に至りては露國の露國軍中之を議するものあ
り蓋し之を以て欠長なりとせば露國が陸軍を加ふ

れば自らの之を改めん(蓋し其後日本歩兵が攻撃
に秘密隊次を以てし之を謂ふるに別れ其等の説を
左すものありを見たり)要するに北清事件、米
露戦役の報告に日本は其の兵卒を以て其力を
用ふべき適当の武器裝具を供給するを得た同盟と
し最上親不化人敵として畏怖すべきもの存
しと云ふは依此見たり其意見存し下し露國ニ十
万の軍隊は如何に戦ふの準備あるか其今之を言
ひ難きも平素軍務の時にありても其の待遇は
極く優く能く固者に堪へ他、軍隊の如く平時
より戦時に移る激變の感情なきを得ん北清事件
中、米露人の露國將校下士官を仔細に視察せし

者は最も之を早計に彼等が新起する掠奪者に
て露国炊事軍に在りての一有價物なりとて因て
之を結んて曰く

露国が亦だ清国海軍に海軍を増援せざるに及ん
ば戦起らば日本は海上を制握するを得隨て滿州
に陸軍を出すことを得んば以て今日の高麗に
對する露國の意見は露國は日本より邊境
下の陸軍を聚束せんに陸上交通に依り西蘭月
の久しきと要せん日本が海上を制すべし海
陸輸送の捷速なるに及ばざるなり且戦地は人民
は露國人に快からざれば後方交通線は一も安全
ありと云ふを得が又其兵士を輸送するに西伯利

亞鐵道は單線なり單線鐵道は構造極めて整ひ且
經營最も安き物と以てすよ由り十以上の兵を送
ること難し西伯利亞鐵道は二十哩毎に停車所あり
カイゲンゲを置き亦して構造經營最不完全なり
且又鐵道は河水の點に於ては攻撃を加ふべし乃
ち十歩に之を保護せんに現時は滿州の露兵を
割くも身は不足を感せん乃ち日本人の慧眼は
心ず善く之を看取し一人を出して絶つて鐵道
最弱處を破壊せしむべし身は之も無きも鐵道
輸送は極めて困難にして在滿州露國軍隊の最も
困難なる任務は此の輸送問題にあり然れば露
者の作戰計畫も詳論するに今其の時にあらず陸

軍の作戦方略は総て一方機先を利し攻勢を取
る國の海軍戦略の成敗如何によりて定まらん
一月十四日の海軍に待たる所地は如し
戦事破裂せば亦一國然し海軍たり海軍固然定
まらば全敵の戦略亦定まらん露國軍艦の極東に
在るもの、運動に就ては美國に連する所の報導
正々此に一相傍るも露國軍艦の配置は南後
變化なく其の至張艦隊の本隊は依然として旅順
にありしかば如し旅順には港内狭隘船渠の注け完
からず且つ東海の死角地に在りしを以て味を
振振とすとの艦隊は日本と戦ふに戦略上の自由
を得ず是果來電に依れば露國水雷艦隊は朝鮮湾

ラントン、ヘーゲンと副旅隊地とせんとして
いふ同度地勢好人水雷艦隊若し好人之に據らば
鴨綠江旅順に間の沿岸に近接せんとすに敵艦に
討てり攻勢を取りに足る國より幸の實在は知る
に由るし露國の最強力を有する策甲巡洋艦がロシ
ヤ、ロシヤ、ルソフの三隻は今猶浦塩斯德に
在ること諸報皆之を云ふを見れば蓋し事實言
ふ今日之危機に當りて其の如く露國が兵力を分
割すれば蓋し露國は敵を待たず若し人は進んで
敵とぶと艦隊として初作を行ふに際して其の兵
力を相合し得るも信し難く故が之を能く得
るや否やは甚だ疑はしゲロシヤ亦不詳は一月三日

午後六時漸に港を出ては、何の目的に出た
るか明らなむとせ、既にして大同港に歸り、其の
出入の自由ありと見れば、露國砕氷船は、絶えず港
外の結氷を碎破して出入の自由を保ち、其の
もとの牽せう、創年同港は十二月二十五日、以
て氷結し、旋に四月初週に至らば、漸減せざる
なり、殊著の三大戦と海陸に抑するは、戦況上
抑の殊漸に照すに決り、然るに、可かりざる所
由を、貧見せざる、然らば、其の此處に在るは、蓋し、其の
三大艦は、艦渠に入り、着し、は、修艦を、受くる、の、中
要あり、は、作ら、が、然ら、ば、人、は、諒、明、に、極、陸、に、し、ん、之
も、双、管、す、る、に、足、り、ざる、に、由、り、ん、初、め、殊、の、三、大、艦

の、道、水、も、る、や、今、海、外、某、海、鎮、に、要、地、を、占、む、る、美、國
某、將、校、は、余、に、語、り、て、曰、く、余、は、殊、著、の、艦、隊、を、恐、れ、水
中、露、國、の、積、兵、師、及、び、工、師、を、同、く、所、を、以、て、す、水
中、口、に、ヤ、ル、リ、ツ、ク、の、函、艦、は、一、年、中、九、月、は、
艦、渠、に、入、る、の、必、要、あり、の、存、り、と、露、國、が、軍、力、を
中、割、り、て、は、殊、に、新、か、る、已、む、か、ら、す、る、理、由、あり
こ、に、甚、し、が、然、ら、ば、人、は、如、殊、兵、力、を、死、に、竟、に、解、す
べ、か、り、す

日露開戦前ノ戦局(三)

露國の増援し得る海軍力

露國艦隊の外に、日下、旅、順、に、發、向、す、る、海、軍、は、義
勇、艦、隊、が、ザ、ン、辨、あり、一、月、三、日、コ、ロ、ン、ボ、に、向、て、べ

リームを出發し、日艦隊カエカテリノスラウ新
及オデワサ新キリオデワサ新ハ一月九日スエズ
を出發し軍隊ニ千人兵器彈藥ヲ多量ヲ搭載スガ
ゲン、エカテリノスラウ新ハ共に排水量一萬
餘噸在リテ速度弱ク全速交ト用メテ七十節ヲ
出セズ乃チ期に及んズ能ク旅順に達スルヤ稍々
疑ヒイアラウニテ、ドミトリドンスコイの西輝及
駆逐艦七隻ハ一月七日夜スダ湾に達シ今既に下
ートセードに在リ多令ビセルタ港ナリ来スオス
ラビヤ新及駆逐艦二隻も亦處に待合テ在リん味
艦隊ハ日弁巡洋艦日造者日加新ハ運初ト依リテ
己ハの運初を以テマシ日本ニ巡洋艦ハボートセ

ードに向テ一月九日午前四時ジエノアを出發シ
春日ハ昨夜一月十三日既にボートセードに到着
セリ味ハ露國艦隊の運初ハ頗シ沈月ナリ其ハ
ナリ名乗門家ノ名見セ見ニ夕ノラス試ニ説
クカ如ク現在日弁艦隊の勢ナリ連日武裝架甲排
水量等に在リ極大に在リ露國艦隊に對シハ優越
セ且モ之ハ露國艦隊ノ發スル所ナリ其ハ其ハ甚大
右ハ不露國艦隊到着の曉ハ是ハ甚大異在ナリ
至リセ以テ日弁艦隊ハ比等ノ増援隊の未ダ極大
に到着セズニ在リんガ撃撃同様に最後ノ決定ヲ
與フセズナリナリナリナリナリナリナリナリナリ
ナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリ

あり共に一月九日アエにーんに到着せりとの報
あり波羅船に回心者の如し

日本海陸軍の準備

日本海軍の準備は陸軍と之を秘匿するを以て
を審みよるに由なきも唯々大規模を以て運送船
を具ふるに汲々たるは信ずべきに以たり日本は
従来の日本船の外に海軍百三十隻六十万噸の大
艦隊を有するを以て自家の艦隊を大遠征隊を海
外に出し得る力あり日本は欧州大陸の新開地
が暮々喋々する所ありと由拘はらざ朝鮮に兵を
遣ふるに急ぐらざる如し是れ其所以あり日本
が今急に朝鮮を占領し若しくは其諸港灣を占領

した小ばとて交渉問題の解決に向へ海軍の益あ
るにあらざる却て京城にある列国と軍端を構ゆる
無しとせざれば日本は即ち是の故に日本なりと云
ては暫くの間朝鮮は露國が兵を遣り列国と相見
るに放任するも利とす之は露國の勢力を加
へずして適々自ら其の事なるに足らざる
然り介して日露の互譲終に成らざる日本は最
も已小に復たす時を待つ其艦隊を用ひん其二
新造洋艦日進春日は一十五万噸を採りて購ふ
所あり殆ど國庫を挙げて戦ふを要する戦費の始
めに旅費を棒に振るはざるの金錢は彼に無きか

故に日午政府の更に露國に通牒せんと云ふもの
豈之と相與せずとせんと加也他に又欲慮を要す
二のあり極すに仁川に於ける平均温度は一
二月中華式ノ十度三月中四十一度に一し其三月
月中甚しきは五度に下ることあり浦塩岬徳に於
りては現在一月の平均温度六度に一二月中十
三度に、三月二十七度に、四月中三十九度に上
る是故に戦の次日日本に在り且つ露國増援艦隊の
到着行初の意を要すに至りしむにありずんば
陸戦は必ず東海岸にありしむ之と三月十七日浦
塩岬徳にありしは五月十七日之と延正すこと百ら
ん

先般東京に於て述べたる親兵式ノ兵教に依りし之
を推すに近衛師団及第一師団は未だ部員を行中
ざりしもの、如く而して一師團員令を行中の日は
設備整へて警備の些の遅滞なきは豫め信ずべき也
一方然れば亦一師團の一部は部員を行入りと
の風説あり其の師団と北海道と北方の亦七八
師團とは必ず風が寒冷の地に用せらるもの存する

日露開戦前の戦局(三)

露國の準備

更に露國の準備を見らば大に極東派兵を急ぎ而
して其の数を増大するに至りし模様あり信託に
由れば露國は十九日午將校下士卒二十万人を

極東に置き十九万人は何時にても立ち火撃
を開始するを待可しと現在の局面を以て予小正
一層の兵力を要とせ人而して軍利を鐵道と軍
隊輸送力今の時最に不利なるに於て露國當局は
一層の用意を要すべしと今月二十日付の紙上
に由小正海軍露國の用ひ得る軍隊は二十万と出
るすと云ふ爾來鐵道に依りて幸國より輸送し來
り若し人は貝加爾湖以東の哥薩兵を呼ぶ來りた
小正其敵略は四万に達したるに於て然りと云ふ
味は二十日付の人は戰線に出りて日卒人と戦はし
むる能はざる有り 現在露國鐵道の守備はしてあ
全ありと云ふを待我近來親しく線路を旅行して

鮮小正四十九下之工一郷が諸所に依れば露國は
五密里約一里下之毎に守備兵八人乃至二百人を
配置して線路を掩護し兵を由小正南戦力脱は
日本は固若を以て必ず絶つが又慮せず鐵道を破
壊するは又疑ふ可からざるか故に貝爾州より哈
爾濱に至る九百哩の間及哈爾濱道より海上に至る
二千哩の間必ず兵を以て踞路を保護せざる可か
らざるを以て之を破壊せんとする企圖は假令脆
弱なるにせよ種々の困難を生じ必ず野戦隊に
り大部隊を割いて守備を全ふせざる可からざる
に至らん大軍の集束と共に軍用を彈藥糧食等の
供給を絶つが故に仰がざる可からざる時は鉄

道線、安国は露国に取らるゝ死活的^大緊要とす也と
要す又輸送すのきわの蓋之多行れば混乱益々
甚し人又軍隊を輸送すに列車益々減らん
清国の急をば少くとて疲味と見ざる可からず故
に危急の際清国の妨害を祈はんは為めに亦之に
果したるの兵を要とせん又旅順に及浦塩吹徳也元
身守防禦も主としたるは此に之に強力在り守備
兵を増加し入別に應た下るは海線に在りし軍隊
を配置し敵軍の侵入を候察せしむるの必要あり
人攻守の美を融けしとせば露国が鉄道及要塞守
備兵以外十四万の兵を線戦に出し得し中其甚だ
疑はし思ふに比等のことは行致に在り我輩美人

たり也 聖徳持堡政府善く之を知らん現在露国が
幾何つゝ其兵を極東に配置し居りや其国より外
人の知る能はざる所在り故に兵の配置も三三
々の固より我輩の推想の可然し此日卒の才一日
的の理想に正に旅順に浦塩吹徳を西處一時に攻
圍し或は各別に攻圍し及外救援に來り敵の軍隊
を撃破するにありや其故に露国亦想ふに正に
旅順より東北の鉄道線に浦塩吹徳の北ニコリ
スリ市に軍隊を配置し哈爾濱に總線備軍を保
存し命して哈爾濱より鐵道に依りて兵を出し其
の一翼と爲し在り後旅順若しくは浦塩の攻撃軍
を攻撃すべし初此の軍是東國想ふに伊予然らん

攻方略は正しく防制的なり然れども日軍が一處の
漸くは機先を制し攻勢を取るときは露國は防
ず然らざるを得ざるなり

日露開戦前の戦局(四)

露國陸戦上の困難

海戦に勝つた必要は日本より露國と取らざるも
必要なりとす日本艦隊は直に其力陸兵を上陸せ
しむるを得ざるも露國勝つた日本艦隊は向て用
に上りて攻撃を加ふに足る所要の軍隊を以て
は遠送船を集合すべしとす露國は水軍に
聖彼得堡より
りの報警に依りて露國政府はカハニエツク及附近
の十軍団を極東に派遣し同時に騎兵十師團

及ハ豫備一旅團砲兵をも以て随行せしむるも
軍令を發しなりと云ふ此の軍令を發すは國工
り容易なり而かも之を實行するは難し如上の充
員を行ハ戦地に出すは即ち兵士四万九千人、馬
匹一万七千頭、砲百七十二門、車輛約四千を即
ち出すを得たりかハルコツクと云ふ旅順には輸送
すに困難あり候時、構造も良し且つ攻堅すに
宜しくは恐らある鐵道を以てす加之其車輛も完全
にして設備又整はず今より軍務は滞混雜を
辨せず則ち其の如き大兵を輸送すは映して容
易ならずざるなり蓋し昨日に云ふ露國は十九年二
を行ふに難しとせば了りしむ露國は十九年二

十ニ万を聚中するに数ヶ月を要し左りと云ふに
あらず、爾來鉄道輸送の便利大に加りたるを周
かざ其の困難知るに思ひに、軍輸馬車の鉄
道輸送を省かんが爲めに、東亞亞に於て馬匹
軍輸を垂皆微發することあらん然りと云ふ地方の
資~~源~~限りなり、距離長大なり且地方の輸送具を一
切微發するの結果は商業を障碍し糧食の供給を
担~~持~~妨する甚免か小ざりし、加之正位利を鉄道線上
には軍隊の休憩を行ふに之を容れ教人があつこ
と古く昔軍隊は列車室に起居せざる可からざ
るに至らんレテ、トシヨ一郷の語る所に、作れば具
加爾以來の列車には皆窓に鉄柵を施し、彈丸の

飛來を妨けりとする、滿州の莫利其の如く存るに旅
て軍隊の輸送室に容易存らんや、然れども露軍は鉄
道に依るざる可からざる有り、而して之に依る
の急は先年美軍の南亞利加に於けりし、一七
甚しきものあり、而して又軍隊の免致愈々尋
て此は軍隊の運部力愈々減せんは、明りて其の
事情を欲せるときは、露國陸軍太守は、軍隊を
案外に困難存るに警くことあり、而して則ち露國軍
軍上の前途は、君侯君くし、甚だ容易存らざる存
り
然れども海陸軍を以てするに當りて、軍の將來を推
論するは、畢竟机上の空論の對露國は、力を釘うが

一と妄に手と擔げたり思ふに露國軍艦は積良に
らん符板下士等は積良を知らん而して其の射撃は
深人之を知らざることを得ざるも所が聞ゆる所を以
てすれば平均照準以上にあらずか如し然れば海上砲
は奇策力十の九にあらずして會戦の結果あり力戦
し而して後悔なきものなり今日之戰闘は其の
てすれば長積良の軍艦と其の暗夜三千ヤードの
射程に於て敵の水雷艇隊の爲めに沈没せらるゝ
の憂あり故に今邊に敵艦初作の跡を推測して
露は海軍の強弱と豫言するは容易し

日露外交の秘密

今日の日露問題に對しては露政府は始終秘密を
守りたるに露國は始めより新聞紙を利用して已
此に都合よき箇條を並べ論議を列ねた毫障も
所在かりしが新聞新聞の如きは文接の始なり
日露兩國は全く秘密を守つたものと信じて英國新聞
たどに露國の報章を傳ふるを以て不思議有り
後に至るや心も樂天的に平和の解決を見つ下
きと期し居たり傳教新聞の如きは新聞新聞の如
露國は全く日露同盟の一語も告げたる故に心算
を築ふとの有りたるが外交の秘密の美如
何に孰かにせしむるは字新聞の重立ちたるものなり

露国交渉中の態度が新聞に見る一月に入りその
既戦の疑なくうからざるも信に居たり
美⁰国に在ては停戦のタイムス。スタンゲード、デー
レー、ニエース、ウエストミンスター、ガビット、セレット、シエロクス、ガゼット。
デーレー、テレグラフ等は露国の行動に微しん戦争の先
から難きと説き、週刊雑誌の電存するものにあり
カヌー、クレーター、オターデー、レグイエー等は之
に同じ唯アクトルワク。スビーガー等は疑を映
打て和戦何れも日新をせずバイロットは世間の
驚惶の報導も全然無根ありと一々平和の解決を
期し居たり
所国新聞は前言不ば如く概子樂天的意見を懐き

世に在る社会党のブネード、レビエフリツク
加特カ党のゴロア、反バトリは和戦何れ
とも意見を発表せずプレワス(巴黎)は獨り戦を期
したるトエワレール。デバー。タン等は必ず平
和の解決を見よべきを期し居たり
獨り新聞亦始めより素親的に伯林、ケール
ニツシエ、ツアイワング、ダーゲブワット。北獨逸
アルゲマイネ、ツアイワング等の社説を見れば
戦争の起るべき模様を見ずフオンシワエ、ワ
グワングは獨り新聞として稍々排露主義の露
るが以て平和の解決を期しフランクフル、ケール、
ワアイワングは意見を見るにカール、アンツ

アイトゲル。ケロイワ、ツアイトウング等亦然リ因
エリ。然レ共等ノ新聞ハ形勢ノ重又在るを認メざ
リシにあらざるも社説に於ては英國新聞と相互
一ノ樂天的議許を爲したり

澳國に於ては外務省とオーストリアと係ありと傳へら
る、維也納のフレンドンガラウトは明に平和の
豫言を爲しノイエス、ワイーサー、ツアイトウ
グは露國と戰ふ好まざるも日本に迫らば戰は
ざる可からざるに至りんと論じアルゲネイ子、
ワアイトウングは戰争を豫言し、ボリチンエ、コレ
スボンデント。ツアイトウ等は形勢の釘り難きを
言のノイエ、ダレツセは前駐清獨正公使ブラン

ト氏の意見と連載し、事態重大戰争の免か小難
き所以を示したり

伊國に於ては羅馬のトリビエチ、ギオルチル、
ギタリヤ等は和戦何れも豫言するを憚り白身義
國伯爵香布のマンチバングス、ベジルエは平
和の解決と信じて居たり、米國に在るは概して戰争
の避くべからざるも豫言し居たり

才
八
辨

明治三十七年一月

開戦前の形勢

時事新聞記事

明治三十七年一月

開戦前、形勢

一日

○日本軍艦ヲ責ム倫敦電報

○露國ノ最近ニ送ル電報

(露都電報)

二日

○軍艦購入始末

○購入軍艦ノ回航

○アレキシエフ總督ノ謀略

三日

○吉野灣占領ヲ倫敦電報

○露國ノ送兵ニ至

○時局非ナリ至

○露國ノ遣東兵ニ至

○露國ノ買炭額ニ至

四日

○日露事件ト倫敦倫敦電報

○露國軍艦ノ急航ニ至

○日露間ノ現勢(伯林電報)

五日

○平和ヲ破ル責ハ彼ニ在リ社説

○露國軍艦ノ東航(倫敦電報)

○ 總軍總督，殊選（停發電報）	○ 日露事件之清國（北京電報）
○ 露國言行，表裏（今）	○ 露國回答，內容（倫敦）
○ 浦港，戰備（浦港電報）	○ 日露事件和議（巴里電報）
○ 露艦，急行（釜山電報）	○ 德之新開，干和議（今）
○ 時局問題，露都（倫敦電報）	○ 露國南韓，向（京城電報）
○ 露伴西國民，示威（今）	○ 露國外交官，日本觀
六日	
○ 露國艦隊，動靜	○ 日本要求，溫和（倫敦電報）
○ 日露事件，現勢（倫敦電報）	○ 地中海，露艦隊（今）
○ 露國軍艦，出發延期（今）	○ 露國更，艦隊之派（今）
○ 日露事件，干涉（運動會）	○ 露國運送船，航程（今）
○ 露國，讓步說（柏林電報）	○ 日本，石炭之買（今）

○ 露國，回答（柏林電報）	○ 露國水兵，入京說（倫敦電報）	
○ 巴里，時局觀（今）	○ 英國水兵，入京（今）	
○ 米兵，入京（京城電報）	八日	
○ 英國水兵，入京（今）	○ 日本新購，軍艦由航（倫敦電報）	
○ 米兵，上陸（今）	○ 露國，前前會日議（今）	
○ 英艦，入港（今）	○ 日本之行神，不列國（柏林）	
○ 三高官，奏上（今）	○ 露艦，入港（仁川）	
○ 露國軍艦，出港（長崎電報）	○ 日本新購軍艦，回航（倫敦）	
○ 仁川碇泊軍艦，下（長崎電報）	○ 艦甲石炭，大需要（今）	
○ 滿洲及比利亞，露兵	○ 伊艦，露伴艦（仁川電報）	
○ 露國回答，內容（倫敦電報）	○ 米露兩國兵，入京（今）	
○ 露國回答，巴里電報	○ 不滿仁川，直情（長崎電報）	

九日

○露國出近江近期、真相(倫敦)
 ○露兵、極東派遣(全)
 ○政州ニ於ケル時局觀(伯林)
 ○滿洲防備ノ近情(天津)
 ○黑海艦隊、發航如何
 ○米國、局外中立(倫敦)
 ○各國軍艦、仁川碇碇(巴黎)
 ○露兵朝鮮ニ向フ(全)
 ○日露交渉、政州新聞
 (フーヴォスチ新聞所載)

十日

○美國輿論、同情(倫敦)
 ○地中海、日露艦隊(伯林)
 ○留學將校召還說(全)
 ○伯林、朝鮮觀(全)
 ○旅順口最近情報
 ○旅順口情報別報
 ○滿洲歸國客談
 ○仁川ノ外國軍艦
 ○日本最後ノ決心通告(北京)
 ○タイムズの切論(倫敦)
 ○米國艦隊ヲ訓令

十一日

○英國日本ノ忍辱ハ驚ク(倫敦)
 ○新購軍艦出發(全)
 ○日本、軍艦購入說(全)
 ○バイカル線、竣工(全)
 ○露國更ニ大兵ヲ派ス(全)
 ○独乙の巧言令色(伯林)
 ○美國新聞、宣言(全)
 ○露兵又入京ス(京城)
 ○露艦ト乗組員(全)
 ○伊大和兵、入京(全)
 ○木材談判、成行(全)
 ○露國入兵ト大官(京城)

○露兵上京(仁川)
 ○英艦入港(全)
 ○英艦急航(全)
 ○露國、入京兵數(京城)
 ○佛國亦入兵セシ(全)
 ○一種ノ平和的流説(倫敦)
 ○新購入軍艦ノ出發(全)
 ○露國、回答(巴黎)
 十一日
 ○春日日進ニ艦(倫敦)
 ○日本更ニ軍艦ヲ買フ(全)
 ○露兵、入京(仁川)

○ガルニ在留日本人ノ歸朝事情

○浦港碇泊ノ露艦(下関)

○^{ビザ}露艦ノ碇泊

○滿州駐在ノ馬賊ノ近状

(近着ノ一舟クテノ動向ヲ載)

○露國電報ノ内容ニ時局ノ成

行ニ待致電報

○清國局外中立(巴里)

○露國ノ虚喝(北京)

○露兵ノ至京

○露艦ノ入京

○開戦後給々(上海)

○時局ノ昨今

○京義間ノ交通(池田生)

十三日

○林駐韓公使ノ談片

○所謂日本ノ要求(倫敦)

○大陸諸國ノ中立(全)

○時局ノ露國(全)

○韓國ノ國ノ日本ノ証言(伯林)

○露兵ノ下京(京城)

○露兵ノ徘徊(全)

○仁川碇泊ノ各國軍艦

○露國水兵ノ入京

○京城ノ露兵

○浦港特報(北斗生)

○露國ノ時局(巴里)

○露兵ノ一部ノ入京(京城)

○露兵ノ入京ノ行

十四日

○英國首相ノ演說(倫敦)

○日本援助ノ勸告(全)

○滿洲開港ノ露國(全)

○露國電報ノ内容(全)

○露艦ノ碇泊(仁川)

○仁川ノ近状(下関)

○戰艦ノ碇泊

○露艦ノ碇泊(仁川)

○地中海ノ露國艦隊

○浦港ノ近情(長崎)

十五日

○支那ノ局外中立(社説)

○清國通商ノ獨乙新聞

○露國東洋艦隊ノ所在

○露艦ノ勸告

○韓進ノ入京兵

○露國軍艦ノ進碇(倫敦)

○獨乙ノ時局(全)

○露軍艦出入(仁川)

十二日

○滿州軍艦(日本人(社説))

○日海軍艦(工部局(社説))

○併用東洋增艦(全)

○新購軍艦(勃荷(全))

○極東(露國海軍(柏林))

○滿州市場(開放(全))

○西比利亞鐵道(速達(全))

○半國兵(入京(仁川))

○日進春日(西艦(工部局通紙公報))

○紅海(於(四國軍艦))

○京釜鐵道(速成(社説))

十七日

○滿州開放地(經營(社説))

○タイ(時局(社説))

○星海艦隊(通峽(社説))

○露兵(東洋(全))

○露艦(工部局(全))

○露國(皇帝(宣(全))

○時局(各種(觀(柏林))

○天津(露兵(引場(天津))

○露海艦隊(出港(準備))

○佛國兵(入京(京城))

十日

○英國(日英同盟(倫敦))

○露國(官界(時局(觀(倫敦))

○獨艦(入港(仁川))

十九日

○日露(事件(併用新聞(柏林))

○時局(露國(皇帝(全))

○下(今(事(態))

○佛國(東洋艦隊(新編制))

○仁川(碇泊(各國軍艦))

○日露(時局(併用))

○露艦(民(引場(長崎(電報))

○極東(總督(我(長崎(電報))

○大(長崎(電報))

二十日

○露國(官界(時局(社説))

○時局(露國(興(倫敦))

○露(帝(特別(接見(全))

○工(元(露國(好辭(柏林))

○日(露(兩國(石炭(購(全))

○例(平和(説(柏林))

○露(獨(艦(出入(仁川(電報))

○英(兵(入京(同上))

○日露交渉始末

、日露交渉初期

○日露交渉第二期

○日露交渉、内容

○日本公使、露帝、待参

○平和議款々(巴電)

○露山石浦、米公使(京城)

○極東總督、韓廷(同上)

○金小、日露問題(同上)

二十日

○露国官邊、平和説(神塩)

○電報、柳島(同上)

○露国兵學者、所見(待教)

○露、仲裁依取説(伯林)

○露国新聞、海況(同上)

○美国水兵、入京(京城)

○回答期、平和説

○海港特報(北斗生)

、露国水兵、暴行

、露国官衙、日本、解雇

、日本、拘引セリ

、露兵、艦隊、奉天、港

、露兵、二十、七、日、向、

、防衛、具等、買收

、滿州、露兵、朝鮮、二、日、

、日本人、動搖

○日本最後通牒、内容(倫敦)

○清国會、中立、決、北京)

○露国守備兵、引揚、理由(全)

○伊艦、入港(行)

二十日

○所謂最後通牒、内容

○中立地帯、清国、條約

○露、仲裁依取説

○田中、露国艦隊

二十三日

○朝鮮、嚴正中立(伯林)

○英、伊、干、涉、場合(全)

○遣、東、露、艦、動、靜(待教)

○屈服、か、遷、延、策、か(待教)

○露国、仲裁、希望、北京)

二十日

○露、都、新、海、電、報、欄、内

○露国、莫、意、(待教)

○露帝、躊躇(同上)

○日本、美、戰、(同上)

○露国、慣、用、的、宣、言、(伯林)

○日本、決、意、の、宣、言、(待教)

○英台使と海軍干渉(北京)

○露国鉄道電信計畫(京城)

二十九日

○日軍回巻ヲ促ス倫敦

○露国瓜牙ヲ現ス(倫敦)

○ゲーダホス通行因致(日土)

○回航中折損軍艦(日土)

○東航中ノ露国軍艦(日土)

○清国ノ仲裁哀求(倫敦)

三十日

○露国ノ回答(倫敦)

○英台政府ノ態度(倫敦)

○浦港情報邦人不安(長崎)

○日本艦隊ノ無謀

(ノールウエスヶ所致)

○露国未ダ答ヘズ

○是果新国ノ日露戦争歟

○回巻未ダ(倫敦)

○露正中立ノ実行(北京)

○銀行界招待會

三十日

○露国ノ通州と他案

(露都新聞所載)

○露国邊境危機(倫敦)

○回巻ノ不満足上ニ倫敦

○露軍鴨綠江ニ向フ(日土)

○新購船ノコンボ發(日土)

○露国回巻ノ遲延(日土)

○日露列國ニ通牒ス(日土)

○露軍鴨綠江ニ向フ前報(北京)

○袁總督ノ鏡蓉注元(日土)

○牛莊稅關長ノ車送(日土)

○袁氏日本ニ白フ(上海)

○韓國ノ牛乳ト伊國(京城)

○佛艦挂鐘(仁川)

戦争前ノ諸報

東京日々新聞所載

三十六年十二月

二十一日

二日

露伊同盟ノ敵

〇極東問題(一)

(一)十一月二十八日

(ノ)ウオエ、ウレニヤ紙所載

(英國各新聞記事)

二十三日

三日

露伊同盟ノ敵(續)

〇極東問題(三)

三十日

七日

露人ノ日本觀(一)

〇露國新聞、日本陸軍評

(ノ)ウオエ、ウレニヤ紙所載

九日

三十一日

〇露國人ノ意向(露邦發)

〇露人ノ日本觀(二)

廿七年一月

三日

○局外干涉要求(北京電報)

○露国政府、回答(倫敦)

四日

○露人、日本觀(三)

○日露同地、上露国(倫敦電報)

○露国駐延艦、急行(全上)

○露国、回答未し(泊林)

九日

○露兵、韓国、上陸ス

○露国政府、緘黙ス(倫敦)

○露国艦隊、出發(全上)

○極東委員會、決議

○露国極東大守(倫敦)

八日

○日露交渉事件

(ノースウエストリミア所載)

十三日

○三圍干涉、當時(倫敦電報)

(各日、日本、五脚地)

十四日

○政州新聞、日露問題

、日本、主張

、露国一部、意見

、日本、情形

、旅順石鈿案

十八日

○露国、對清政策(ノースウエストリミア)

○滿韓交渉、日本、考(スウェーデン)

○日露孰か勝つ(全上)

○露国、地位(全上)

○露国、活動

二十一日

○露特、滿州保有論(ノースウエストリミア)

二十三日

○日露開戦、露人、注意

(露国、ソウリン新聞)

二十五日

○極東大會議

二十八日

○露人、極東問題(ノースウエストリミア)

二十九日

○北京特報(特派員)

○舊曆十日、露国回答

(倫敦新聞)

三十日

○露人、極東問題(三)

○外字新聞、開戦前
○日本象徴院、開散

三十一日

○極東問題ニ対スル日本ノ地位
モーニング、ポスト

○露帝ノ平和希望

○日露開戦ノ外聞新聞

○露ノ極東問題(三)

二年二月

二日
一日新聞ノ要

○露ノ極東問題(二) 西一日新聞ノ要

○露國ノ新聞政治略(上)

三日

○露國新聞政治略(下)

○露ノ哥薩克兵

四日

○對獨ニ感情(某報ニシテ)

○露ノ極東問題

○露國ノ主張

(モロカ、マニラ、カール)

六日

○浦塩院泊、露艦

○列國軍艦所在表

八日

○露國新聞、滿韓論

十日

○日露斷交後之態度(但林)

十一日

○獨乙、日露戦争公表

(デイエポスト)

○併國ノ地位(巴里西世界評序)

二十日

○滿州ノ露國兵

(北清日々新聞)

二十一日

○露政府ノ窮狀

○開戦前、欧州新聞

二十一日

○日露開戦前、戦局(一) (タイムズ)

二十二日

○日露開戦前、戦局(二)

○開戦前、日露問題

二十三日

○日露開戦前、戦局(三)

○外字新聞、日露開戦詳

(香港テレグラフ社説)

○日露外交ノ秘密

二十七日

日露國戰前之戰局(四)

二十日

獨乙ノ與停

二十九日

上海通信

戰爭前ノ諸狀報

東京朝日新聞

三十六年十月

二十五日

五日

獨佛ノ平和觀

露都郵信

二十七日

十八日

一英人ノ時局觀

露都郵信

三十日

二十日

佛字新聞ノ日露時局評

米國上院議員ノ日露戰爭觀

今年八月

露都乘組技師ノ日露戰爭談

三日

二十二日

露國上院ノ戰ノ意アリヤ(ウイニシニヤ)

露都郵信

露國軍事彙報(露字新聞)

○露都郵信	○外國戰時通信員
九日	二日
○桂首相、時局談	○滿州の動息 (滿州太郎)
(三エニク、トリヒニ新聞所載)	○滿州馬賊談 (滿州太郎)
十日	九日
○倫敦タイムズと時局	○露國ノ戰備愈々急 (外務省着)
十九日	○露國新聞ノ和戰論
○露都郵信	○滿州馬賊談
今年二月	十日
一日	○立派顯米と外國 (社説)
○露都郵信	○氷上鐵道計畫
	○貝加爾湖交通期 (滿州太郎)

○開戦と諸外国人	○獨乙の中立態度 (社説)
十日	○露都郵信 (續キ)
十日	○米國及佛國ノ態度
○政露兵ノ輸送 (滿州太郎)	○獨乙外相と極東問題
十九日	二十五日
○政露兵ノ輸送 (續キ)	○露國財政の現況
十九日	二十三日
○露都郵信 (一月廿五)	○香港新聞の目録用紙評
○獨乙郵信 (一月廿五)	(香港テレグラフ)
二十日	二十七日
○獨乙郵信 (續キ)	○露國政府の怒言
二十日	

○露西軍の兵

三千台

○露西軍の兵

開戦前諸報

(國民新聞所載)

三十六年十月

一日

○北清一瞥

旅順の戦備

(旅順に砲台を築城す)

○日本と露西軍の

(スダクテーキー社説)

七日

四日

○韓国通信

(對星橋さん)

○日本と露西軍の

十日

○韓国通信 (對星橋さん)

廿六日

○北清一瞥

旅順の要五軍港

○極東の時局と日露

(シリールマン氏)

○西路国の外交(伯林)

廿七年一月

七日

日露の關係

(ケ、スクリュースキー、著書より抄録)

極東時局ノ真相(一)

(内、エディンバラ評議)

二十日

極東時局ノ真相(二)

二十一日

極東時局ノ真相(三)

二十二日

在滿州露軍ノ清語研究

(関東報)

二十七日

日本國民ノ忍耐

(アクトルツク所載)

十九日

関東報の時局論

十八日

滿洲開發と日本

(独乙、フオシフシニ、フアイロケ)

十九日

華人禍(タイムス東京通信五)

八日

今年二月

四日

米國民ノ日露觀(一)

日露戦争と其財政

(ホストン、(ラウド)

十廿日

韓国通信 対星樞主人

十八日

(韓国、中立政策)

獨乙新聞の台詞

五日

日露武力の比較(一)(タイムス)

米國民ノ日露觀(二)

獨帝日進、春日と露學士

十一日

(ロカール、マンツァイ、セル)

美國と極東の戦争(タイムス)

十九日

十四日

日露武力の比較(二)

極東時局と美國

二十三日

(美國國民評議)

日露國、經濟及財政

(米國週刊雜誌「アウトLOOK」)

二十四日

口露國の經濟と財政の

口露國の日本航

(皇東報)

二十五日

口關東州と滿州の馬賊(皇東報)

口蒙古鐵道の計畫(皇東報)

二十六日

口露國の陸軍(タイムズ)

二十七日

口露國の内情の

(雜誌「アウトLOOK」)

二十八日

口獨の新聞の所論

才
於
辨

三十七年三月分

關戰に關する外國側の評論

時事新聞所載

日露開戦に關する外國測の評論

時事新聞所載

三十七年三月

六日

二日

○露國名士の意見 (ダリニウストーク)

○改革新聞の發刊

七日

三日

○日露戦争の布哇

○アレキシエフの作戰計畫 (紐育タイムズ)

○關東統督の論述 (上海新聞所載)

○日露両軍の比較 (ヤイテタイムズ)

○露國名士の意見に對する評論 (ダリニウストーク)

四日

○露國測の外交官 (有九日露都記者)

八日

五日

○日露開戦論 (デイリーブレウ社説)

○日露戦争と露國軍官報

○露國自衛の陸軍 (アフガタイデー)

九日

日露戦争と平和會議

(浦塩新聞東報社説)

日韓協約と北清日報

十日 (十日ヨリ欠)

旅順陥落の豫想 (外國武官の説)

露國不意奇事を策す

(コレック艦書箱)

露國の述に對する批評

(タイムス通信員)

十三日

日露開戦を論ず (デーリブレス社説)

十日

露國側の消息 (フォロニスマイック)

十五日

露國の外交策 (タイムス通信員)

(露國自由主義者の意見)

露國の開戦 (コンラッド・シヤンクニカ)

十六日

日清及米清條約に關する論評

(イウラエラレミヤ社説)

日露勢力の比較 (グラッドストリート社説)

十七日

露國將軍の演説

露國の清國の戦ふべし

(アウラレミヤ新聞社説)

滿州に對する露國政府の所見

(ダールニウオストーク)

十八日

昨年に於ける露國海軍

(ノグシレミヤ)

十九日

敵方の戦報 (アウラレミヤ)

露國日本挑戦を非難す

二十日

佛國新聞の時局觀

二十日

タイムスの日露戦争批評

開戦當時の浦港

(ケヤイア、タイムス)

ロカシニ伯爵の所言

(米國聯合新聞通信員社説)

二十一日

歴史は往事を繰返す

(神戶ハルト)

極東に於ける露國の兵數

(シヤハン、デーワーランド)

タイムスの日露戦争批評

二十三日

○英国と日露戦争

(ジヤンシ、デーリー、アトク、アーク、アーク、アーク所載)

○日露の戦略(上海、海軍新聞)

二十日

○タイムズの日露戦争批評

(日露の戦略(上海、海軍新聞))

二十五

○タイムズの日露戦争批評(四)

○露国と日韓協約(ジヤンシ、ヘラルド)

○日露戦争の結果

(エール大学教授ウーレ、博士著)

二十三日

○タイムズの日露戦争批評(四)

○伊国新聞の日露観

(ジユルナル、デーバー抄譯)

二十七日

○タイムズの日露戦争批評(五)

○英国の兵を果すの力

(国東報前載)

○日本の行動を見出す

(国際法学者の談、紐育サ、所載)

二十八日

○タイムズの日露戦争批評(六)

○日露戦争と伊国

(セリシナル、デーバー抄譯)

○露兵の實状(米田新聞)

○マハン大佐の日露戦争評

二十九日

○日露戦争と伊国新聞

○タイムズの日露戦争批評(一)

三十日

○歐洲大陸に於ける時局觀

(撰者外務大臣の所著)

五年四月

一日

○タイムズの日露戦争批評(七)

四日

○露路國、輜重(倫敦タイムズ所載)

○旅順にの實状(上海タイムズ所載)

三日

○日露戦争の張本人(紐育サ、所載)

○タイムズの日露戦争批評(八)

二日

題(國東報前載)

○露艦のボスフォルス及び舞士通過同

○タイムズの日露戦争批評(九)

○マカロフ提督と評す (長崎プレス電)
○日本の大捷 (ロンドンタイムス所伝、大要)

廿日

○在比利亞鐵道の輸送力 (テレグラフ)

○日露戦争の全至主義

(ロンドン、デーリーフットパタータイムズ所載)

○金銀は戦時禁制品なりや

(セザリリニエブラ、エーオー社書)

廿日

○日露議定書と引用

(シロニナル所載)

○氷湖上の馬力鉄道 (関東新報所載)

○政廳の所在地を略す

(香港テレグラフ所載)

廿日

○日本の在防戦域 (紐育サン所載)

○固格射撃後の旅順

(近着米田新聞)

○在日海軍艦隊の日露戦争時

(アルゲマイネ、ツァイトUNG)

廿日

○日露戦争と英佛

○露国新聞の戦評 (関東新報)

○佛国新聞の戦報 (ジュルナン、ヂェバール所載)

○露国の互駁

○旅順実見談

(アソシエイトッドプレス通信員)

十日 (九十日、新聞欠)

○米田新聞の日本人観

○埃及新聞の日本観

○露国軍政の拙劣

(独乙専門家、評論)

○海軍戦術の革命

(英國海軍省の所言)

○日露陸軍の優劣

(米田軍人の評論)

○宣戦前の戦争と国際法学者

○露国名士の意見に對する評論

(タリニー、ツォエト、ラ所載)

十日

○嗚呼二月八日

(ノール、ウエ、ウレミア社主、スウオール、ウレミア社主)

○事情に暗き露帝

(維世、アルゲマイネ、ツァイトUNG)

○星海艦隊司令長官の談話

(タリニヤ新聞所載)

○ダーダネルズ海峡に侵入の必要

(クルタス、スキュー、ツァイトUNG)

○最近の露比利亞旅行談

(一是五商人談話)

○元國の局外中立

(フランクフルト、ボッケン所載)

十日

○黑海艦隊の遣軍難

(タイムズ、スキークラフエスニック所載)

○戦争と列國 (フォートナイトリフジャー)

○清國の所有者に対する露國の威嚇

省の論述 (クリミア新聞所載)

○浦塩と鈴ヶ子と洋艦隊の行神

(タイムズ、フレイムエスワウ)

○タイムズの日露戦争批評 (三)

十四日

○露國軍官報の証言

○清國の中立と日露西國の覆盆

(クヤイナガセツ所載)

○戦争と列國 (續キ)

(フォートナイトリフジャー所載)

○戦争と列國 (續キ)

○日露戦争に關する觀察

(独立エニール所載)

十六日

○日露の勝敗如何 (佛、石、佛、ル、ロ、ア、ボ、リ、エ、氏、意見)

○戰時禁制品に關する清國の公文

(上海新聞所載)

十七日

○戦争と列國 (續キ)

○タイムズの日露戦争批評 (三)

○日露戦争に對する獨逸の政策

(ビューロー、伊、濱、院)

十八日

○タイムズ日露戦争批評

○本人の露兵視察談

(京城、芝、草、新聞)

○露兵の見たり日露戦争

(グロフ、新聞所載)

○戦争と列國 (續キ)

○露國機關紙尚ほ虚鳴す

(上海、佛、字、新聞)

十九日

○戦争と列國 (續キ)

○タイムズの日露戦争批評 (四)

二十日

○英國諸提督所見

(ゼネーヴ、アル、エンド、ミ、リ、タ、リ、リ、コ、ド)

二十一日

○タイムズの日露戦争批評 (五)

○澳國新聞の旅順海戦評

○正比利亞鐵道(紐育サン)

○福機巴里に在り(紐育サン)

○日本艦隊、成りト独乙新聞

○伊國新聞の旅順海戦評

二十一日

○タイリスカ日露戦争批評

○露國大敗と伊國新聞

○西比利亞鐵道(紐キ)

二十日

○露比利亞鐵道(紐キ)

○旅順最近海戦と伊大利

○露國同盟と伊人日本の影響

(ウオールド所載)

○日本の大捷と米國

二十日

○開戦の宣言なき戦争の例証(紐育報)

○日本がワム島國海産電線布設

と露國政府の反対

(アローミーアントキゲージョー)

○最近海戦と北歐諸國

○露國の情勢(日獨報社通信)

○以て其の所迫を具し

(アローミーアントキゲージョー社通信)

○ウエストレーキヤの意見

○露國の護送(カワシニ他)

二十日

○日露戦争と伊國海軍

(ジューナルデデム)

○伊國新聞所報

(ルコタン所載)

○年莊同盟と列國

(米國新聞)

○月卒の六七將軍

(デーリーワール所載)

○開戦當時の日本の態度(倫敦)

○露國新聞の古家流

二十六日

○露國諷刺の可創

(フオツセ、ツアイツゲ)

○クロバトキン七特の証表

(モーニングリーダー)

○露國新聞の生鱈目戦報

○露國宗谷海峡誌(ウロスタ)

○タイリスカ日露戦争批評

二十七日

○日露戦争の比較

(アローミーアントキゲージョー)

○日人皇親近(スタンダード所載)

二十日

○日露戦争のバルカン問題

(伊国ニチルナルデデー社説)

○日韓の干渉と外人の利益

(マンセスターガーゲン)

○露国新聞の抱負

二十九日

○露国の清廷に月道

○露国革命軍の運動

○比利亞鐵道の大鉄監

(松本報前載、リニヒモフ社所載)

二十日

○ライムツ日露戦争批評

○極東に於ける露国陸軍力

(極東報)

○旅順水雷攻撃等とフリーマントル大

將の意見(ネーヴン、マドミウタリ、ヒート)

戰事前，諸狀報

東京朝日新聞所載

目次

- 一 露都郵信 (四十二年十月) 六日露都發
- 一 露都郵信 (二十一年十月) 露都發
- 一 露都郵信 (二十一年十月) 露都發
- 一 露國真戰ノ意アリヤ
- 一 露國軍事彙報

露都郵信 (十月二日) 仙風居士

最近露國の大目的は純潔に一足し武断手段を以て急進的に其目的を達せんとし一時勢を内外に示したれども外來の對抗が露國の豫想に及ばざる容易のうちにありが加ふるに米國は權矢を放て列國通商の爲め支那と一七奉天府並東縣を閉かりし如く盟心には露國の閉心の模様あり且つ近來の形勢は日々に非にし七十年其日名譽と共に改革を實行するの意なく東欧の諸小國は今秋の議兵運軍其他の爲め外邦に對し七稍々平穩の態度を示せども何日ヨリ七奉日如人たすと期すにカハらず日露國はよし近來を幸しとせざるは是

迄の失と敢て打たし満州に全力を向くは敢て
も参りざる可し加之右ら下り政に不統一あり財
政も亦不成就なりと甲侯得て武新派の決心通り
極東に於て能く無利派に積極的態度を固執する
を得べしといふ是即ち露國中央の新聞が旅順に大
守をレオセして一將軍の機関國東報と趣き異にし
比較的慎重の態度を執る所以たるべく侯絶末大
守の機関國東報が露國を代表して常に剛毅的の
筆鋒を弄しつゝ、或は柳葉舟の通りにして妙に
も露國の實情を照し合せて不似合の振舞と百甲
侯、言許不自由の露國に於て新聞の執筆許は
一に當局者控関の下に成り就て機関國東報の如きは

世に大守の機関新聞と稱せらるるもの居るが故に
其の議論は番人アレキセして大守の意見として
見らるを得べく該新聞が我國に對し大々的議論を
試みるは怪しむに足らざる只政府の命を奉りて議
許する露國新聞の放言に至りては尤に怪しむべ
き値之ありなく現に露國の新聞を大にせむ批
難し其間メシケエルヌキ一と露國の機関雜誌が
ジダニ此は國東報の筆鋒に對し批評を加へ下り
意味に許し甲侯
曰く日露戦争は満洲に局を結ぶつゝ、あるが如し
絶東の形勢は平和に傾けり而して我々新聞の
調成に平和的なるに反し獨り國東報が日本に敵

情の口調を以て立論するに怪しむ可し 關東報に
しる若し一個の地方新聞を以て任せば其所論は
何方に大か吠か否かと打捨て置きて可なり然し
此類新聞は露國絶東の外交機關紙を以て任じ之
が爲し日本人として該新聞の口調は別ち露國の
政策として合應せしむべきのなり 我皇帝陛下は
該地方の官憲に余り日本と國際談判も開始せし
めらふ所ありある最中に該地方の新聞が櫻りに日
本と朝鮮と主張するは以て外の事と云ふべし
獨り同境の新聞が獨り朝鮮と主張するは以て
主張し又波斯と其國境を以て朝鮮と主張するは
露國の爲め

に有利ならざる可し 此の故に時々のワルシヤの
守府及高加索斯太守府に於て其地方の機關新聞
たりしワルシヤ及び不ガリスの新聞は決して
の關東報の如く櫻りに外交に付て中央政府の意
見と反對する意見を出さざりしや否や
よしや否に異りたる意見ありたりとするは
の如き若徳たる議論をなすこと正思のも依らざ
りしや否 強東の如き住民の少なき我産漢在る地
方に於ては才一に統一の基礎を堅固にし其年中
史と一致を保持すること 必要にして從て地方の
新聞が櫻りに中央の紙持する所に異なり 政見を
公にすは國家の爲め望まざりしからざることなり

學ヲミテグエジガニこの所存は歟と云ふに有之
侯爵共現下露國の政治社會に於て該紙は一種の
新見を抱くものとして餘り重きし小工の新聞に
有之從道來心ルガシ羊島は昨今表面上血の雨を
降らざる無事なるが如しと云ふ其厚大に然らざる
嶋嶺火にの破裂期は日に増し接近し來れるもの
、如くお政府はミニエロフスデに於ける攘夷
海外相保護の之意は依りて西國最初の要求大に
は快く之を容れたるが如し其後ハ六國条約
成小の要求は極く極く不同存在に如し然るに
又の前三國条約全然お其の主權を無視したる
ものも從得ば之れを容れたる既にハフアデテツ

ク分々の激昂は非常なるべく是れ即ちお其若政
府が一方には列國特に獨逸に對し要求事項を緩
やかにすることにつき干渉を求めんとし又他方
には攘夷露國に對し明瞭の回答を與へざる所以
たるべく從道來心ルガシ羊島は昨今表面上血の雨を
降らざる無事なるが如しと云ふ其厚大に然らざる
嶋嶺火にの破裂期は日に増し接近し來れるもの
、如くお政府はミニエロフスデに於ける攘夷
海外相保護の之意は依りて西國最初の要求大に
は快く之を容れたるが如し其後ハ六國条約
成小の要求は極く極く不同存在に如し然るに
又の前三國条約全然お其の主權を無視したる
ものも從得ば之れを容れたる既にハフアデテツ

獨露亦帝グイスバーデン會見セ今ヤ過去ノ話と
相成ビヤ目的は近東絶東に關~~聯~~才と有之ル、今
回ノ會見には亦帝國に外交的交換演說無之候ハ
バ表面エ少し物足りぬ思旨也候ハども其言ハ大
に然ラズガ如ク獨露相互露外相國には重大な
ニ漢議ありと候、俄獨ニ新軍ノ所報に依ルハ獨
ニは近東にモ絶東にも直接カ利益干渉を有セザ
ルハ西方國に對シ中立を守リ下し決の中立は露
國の爲めに大に必要にして有利にして下しと有之
候獨ニは外交辯を以テ近東絶東に利益を有セズ
と會明致しり、ども事實は且に及チ油断在り如
は露に獨ニの非をかり英佛近年カ親交は試に非

聲たるとセハトしてモ口ツコは露佛國カ有と一
認めらるル三國國には地中海に於ける格別の相殺
兩滿に於て在るにセカ、如ク從て二國同盟對三
國同盟の組立亦少し變更を来しつ、あり候
同は宛然同盟の中國に位し来るに至り候

露都郵信(十月十日)

露國は容易に滿州を還所すゝの色なきの存り
丁例の流義を以て日本と朝鮮に争はんとし不幸
に七日露ハ交渉問題となり名が滿州の門戸を閉
放せんと欲し止まざる米英は露國の態度に憐
然たると至りしのみならず是迄敢て心服するに
あらざれば其力足らざる為め露國に對して一
に何等無理御最として服従したる支那さへも大に
節を来りしし、如く昨今の電報に依れば袁世
凱は年を奉天に遣ふんとすありたとい事実は
あらざるとすも以て形勢を案ずるに足り申候状
の如く支那も亦も大胆に勇氣を鼓舞し来れる所

以如也の如支那に對する露國の謀略の過大なる
に基くことは云々又支那が露國の介目を解し来り
たるに因り申すべくは是も露國の介目を誤解
せしむるは支那に限らず列國も多し誤解の氣味
ありしゆ存らざる露國人自身さしむ自身の介目
を誤解し今日も神の外には露國より強き力
ありし心持存たりし露國百姓も昨今露國の力に
決して無限の力にありざることを詳知し来り
し極端に候こは露國の政治上餘り結構なき現
象に無き下候

露國は大同にして其内部の疵も亦一も世人の
考ふる如き仰々敷きものに世に候得共とて

所詮近東絶東を一時に調理すべし候故
に絶東に專ら存らんと欲せば自然近東に疎存ら
ざるを得ず近東は露國に歴史的干係ありし露國
將來の爲め根に之を獨り奪はざる能はざる也
絶東の目的の愈々達し得らざるは近東を獨
り奪はざるは差支右しとの方針が昨今の露國の
方針なりしは絶東の目的は果して貫徹し得らる
、や否や覺束なきの存らざるは力に乏しき世に
は近東を主とするの論者ありしは獨りし
懸念は獨りし利益の爲め絶東に誘はれ近東を
全く顧みざるは露國將來の一大危險を唱ふる也
のちあり加ふるに政憲中心中央の改革改良を重

ずる論者有之況んや外來の抗議容易たりずと申
候、此所謂我新派の手段也絶東に於て全然自由
の行動を許す身少く夫政府より之の牽制を蒙る
に至り矢張外交辭をも要するに至るものと存せ
り小候

露國の進軍に對する政策は政治的にして非經濟
的なりトシ之を經濟的なりトシても其の經濟は
極義的なり故に露國の利益は滿州に於て列國の
利益と相及す是ハ露國が滿州の開放を欲せざり
て滿州の電信線も在り午莊の衛生監督權も有
り遼河の架橋も禁ト東三省に滿州將軍と制す
キコンミス丁の官職を置かんを欲す所以に在

るや、今俄滿州に於て露國が單に鐵道の利益收入
に満足致し得ば何等の衝突も到ら無之候得共露
國新派の論ずる如く露國の滿州に於ける干渉は
獨一の膠州英國の威海衛に於けると其干渉^{其趣}
に及ぶ有之候換言すれば英國の侯及印度のボス
ニヤ及ハヘルツラギニヤと同然と有之候ハ其結
は中々面倒なすや、今候落着然如何は見當り申
さず候
バルガン羊場は形勢矢張穩かならざるニルツス
ツガに於て換露外相同に成りたる改革案に對し
土政府は未だ是迄の返答を與へざるハ打たらず
土民マホメト教徒は迷信の結果耶蘇教徒と同

歎か下りの省故すの結果血を流して耶蘇教
徒より得たるもの血を流さざりしとせし耶蘇教
徒に近す能はずとの感念を有し改革案に不平を
を以て上帝に容易に改革案を容るゝの色無し
併し若し之を容れざることに引同の態度容易
ならずれば其政府も板板の態に有るは該案
に對する引同の態度は中東の通り英首相バル
フォード卿の演説の通り併しラムスドルフ伯也
自行の結果獨り獨撰而帝ウイスバーゲン會見の
結果何れも撰撰改革案に同意にし之就干パル
オード卿の如き該案はミニムムのカの存りと
演説したりせしが為め獨撰は上帝に演説し工政

府は十七撰撰改革案を容れざるは英國は此度々
中シムムのカの要求を在りしと申入れ従つて工政
府も少く人動き来りし者の如し其り作らるる外に
外交に巧むるも其官吏は絶東の雲行と維綱の
風雲將た勾加利事件に注意を怠らざる者の如しこ
れ畢竟卷案と延期する一原因在りし候と帝に
しと若し全然改革案に同意せば羊嶋の形勢は一
変し羊嶋耶蘇教徒の位置高きと同時に羊嶋の
現状変つて本邦の戦場となり従つて露國は指を
羊嶋に染むるの機会とすること能はざるに至る
べく羊嶋が其程度に改革せらるゝことは露國の
為めに有利ならずしとすも他國の手を經て絶

對的に改革せらるゝことは露國の爲め却て有利
ならず露國に於ては近來を欲すべし軍獨の并
爲を以て其其に改革を迫らざるべからず然る
に今日日本政府に交渉したる案は露國と共に制定
したるものにしん換差すべしは他府政府の懷疑を
免たすものに外ならずは其の如く露國が軍
獨運新を日本政府に試行得ざるは千八百九十七年
の璦琿懷商条約が爲りたりとは云ふ又大目的を
絶東に有し近來の亦有極的なるの結果なるべく
候
パナマも益々獨立したるか所差知の通り北米合
衆國と同様に政州にては既に其獨立を認め昨今

半官のノオウオエウレミヤ新南の所報に依りしは
露國も之が獨立を認めたりと有之候パナマ運河
の開通は太平洋の一大出来事にて我日本將來の
地位に頗る有望たりと同時に多事たるより存在
候
印度太守カーペン卿は愈波斯旅行を實行し太守
旅行の結果ガシル、テヘラン間に鐵道布敷せら
るゝことありしに有之候又英國は西藏が条約を履
行せざることを一軍を西藏に進めたりと有之候
得共露國新南の平生の竟氣込打にち似ず概して
之に對し雖も不善に有之候
露國中今度極東に組撃歩兵二個師團(第七、第八)也

増加し半候外國新聞の所報に於ては露國は海軍
を擴張し特に旅順口の經營を嚴に造艦場を建
設すに由り候露國は太平洋沿岸防禦を嚴にす
るに百隻の水雷艇を必要とすに由り水雷は材
料を政州より輸送し絶えず製造すに目録
見の如に候露國は滿洲從得堡間に補充電信線と
必要とし今度之を架設すに由り之が爲め政
府は六十萬兩を支出すに由り候露國は千ヤリ
北京間の鉄道と必要とし其後枝節に於て線路查
定ありしが線路の延長は千五百露里ありと有
之候に由り工部局に電信架設の由り候東清鉄
道には枝手不足の爲め今度滿洲に於て養成の爲

此工手學校を開設すに由り候にルツク有に於
今度不都合あり一帝構成せらるるに於て
の一高市と相成候由り

露新郵儀(十月十日發) 仙風居士

黄色人種の危険は、吾意は、欧州に於ては、最初伯
林社得遂に使用せらるゝ三割千歩の當時流行文句と
なりたる由なるが、其後、露に於ては、之を耳
にせざるの可からず、補ふて、小は、露國新國は「我々
亦、其細細人なり」との口調を以て、其政に對し、居り
小庭道來は如何なる風の吹き廻しにや、露國新國
の種々、黄色人種の危険は、文句を使用し、來り、西
政を警醒、露に於ては、如何にや、奇妙奇怪の變調に有
之、何れ、愛主義の即、露教國民が、一時、政策の爲めと
は、云、振りに人種論を、擔ぎ、出する、片腹痛、と、此、身
に、有、之、儀

露國の目的太平洋に在り露國の手段武新に在り
は長年何人にセ秘密に其の既露國が文治手段を
捨て、武新手段を用ひ滿州遼東條約の明文ある
に依りテ耶魯張り出りし堅くを擅り今に滿州を
り撤兵セズ滿州の行政を支那に還附セざる所以
の力のは滿州と埃及同様にして持危在来一也露國の
遺訓たる「一度樹てたる旗は倒す勿し」との格言に
依りては言、其重なる露國は露國新用が常に唱
道する「東洋に於ては腕力は權利に侵す」との文句
を應用したる結果たるべく後述小沢氏とい兵を
滿州に進め、總東の兵力を増加し、バルチック海を
大んと空虚にし、軍艦を太平洋艦隊司令官とす

ル中將の指揮の下に集めしめたりとせざるを以
て直に戦争を始めたる氣にはあらざるべく用捨
た人始めらば、日本國政府は困難なるの存在する
す太平洋の兵力及沿岸の防禦として未だ充分に
あらざれば、出先も随分困難なるべし、要は成るべ
く兵力を實地に使用せしむるを見ても同様に以
て其の目的を達すべしと云ふにあり然るに案外
に、外來の抵抗力は露國武新派員の思ひたるより
も甚大にして、東洋にても權利は反し腕力より
も尊重せしむる支那と英と何時までも條約は紙と
も汗をりしもの定義を以て満足せざるか故人米英
は滿州の門戸を開放せんと欲し、止まず獨逸は

軍相ビニ一沼の英捕獲約解散以来自己の利益上
近東と絶東とを相殺し露国を絶東に向て更に近
東を顧みたるの暇なかりもる爲め滿州に露国の利
益を認め得ず其去りして油断は相成らず西伯利
亞滿州に獨逸商人の多數存するは驚くべしとの事
に非ざる如く列國は概して露国の態度に反対た
るの可なり日露の交渉未だ決定せず其恨未だ
成らず加ふるに支那は露国の奉天再占欲を以て
大に争かたざる節令の要報に依り表世凱氏は
四万五千の兵を率ひ奉天に向はんとすとの事
懸念存らざる如く外人外來の反対亦さして又多少
以部にも反対ありとの如く其反対は率に手段

に對する及反對の可なり又目的に對する及反對の
ありとの如く、如し手段に對する及反對は政治を先に
ありとの經濟を先にすると有る候得共之に及
て目的に對する及反對は全然滿州を欲せざるもの
にあり其の如くには更に外政を重んずるものと近東
を重んずるものととの差別を附するを得可し併し
滿州地業は至極微力にして爲政面に同情を表
することの可なり然し近東を重んずる者如きは
極く無勢力なりと有る候如く其の間に立ち外政を
重んずるに外部の難を急務なりと主張する新派は
有名なるモスコビーに發刊せらるる、ルースキヤ、ウ
エドモスチ及倒のグラジダニンにして前者は露

同の士社會より成り其所謂公平にして露國に
敵対するもの有る候得共奈河せん一節の議論も
代表するに過ぎず一一般に勢力を有る露國を
政家の意見を代表するもの力に失張り羊官の力
よりレ之より至順旅に國報太守の機關等在る
べく候

武新派の満州に目的を達せんとする手段は政事
的にして事実に至りて居坐りて動かす電信郵便
衛生其他行政監督権を握るに水は容易に之を放
たずと云ふ主義よりして候得共文治派の手段は經
済的にして之が爲めに一時手を引きしむる最後は
勝利とて得るに大天と云ふ方より併し其經濟

は人為的にして自然的にあらず故に満州に於て
る經濟利益は列國の經濟利益と一致せず畢竟露
國經濟の進歩の法も露國の臣民河小の商工業に
迂にして世界市場に於ては自國政府直接間接の
保護を待たざれば外國人の競争する能はずと云
果有るべく候露國満島者特に商工業を盛らす爲
政家が是より巨億の資本を投じ鐵道を敷設し農
業國を以て満足せしむるに政米流儀に商工業を盛
にせんと欲せしは其製造物に租税を同様に課税
明國に輸出するが爲めにあらざれば其目的は隣
境に廻る米割削に敗路を開き百年の謀を爲さん
が爲めにして自國商工業には西政文明國の市場

に競争の出来ざることには夙に管有者の看破す
所に在る候之が爲め當局者は鉄道に無人の原野
に敷設一人爲の目的に自国民の爲め敷設を闢拓し外
国人の商賣を其市場より駆逐するの方針にして現
に波斯にして近年大に好成績を得たるが如く蒙
古滿州北進方面を確に其の方針ありしといつて
代が敷設前より滿州北清蒙古に始末探検隊を派
し調査しし如しと即ち之が爲め在りしといふ候
し、昨今滿州に武新の世の中にして本國にして其勢
力洪大にして候
露國が西伯利亞滿州鐵道を敷設したる目的は絶
東の經濟を充實し不凍港を得ん太平洋の霸權を

と握らんが爲めにして敢て世に昭道するが如
く太平洋を西洋間通過貨物旅客の利益を得るが
爲めにあるがごとし、政事軍事上は別問題として
經濟上通過貨物に左程の重きを置かざりて及て
地方的利益に重きを置き西伯利亞の殖民農業状
高山林經濟を盛大にして西伯利亞より外國輸入品
を排ししとて政露より輸入露國の製作物を滿州
北清に輸入し外國品に代りて露國を益しす
こは其重なる目的在るが如し是れ即ち露國が支
那の南市を畫定する所以なり露國が支那の南市
に及利すは單に以上經濟上の理由あり出づる
にあらざりし其他政事上の理由あり露國新聞が

北清事件の最と欧州文明の先導者たる外國宣教
師に辭せしむるが如く支那に西洋文明の注入せ
しむる支那が舊風を破り旧慣習を脱し文明の空氣
に感觸するは露國の爲め一夫是疾なりとし従て
外國商人が無遠慮に内地に進入し通商を試み夫
那が其刺激を受くることを露國は一人不利と致
し居り申候故に支那が今度自國の獨立保全と
謀る處の方便としし内地の各市を外國貿易の爲
めに開かんとし西太洋が總督巡撫に余に開市に
關する調査に従事せしめたりとの報は露國の最
も喜ばざり所に有て後故に支那に對する露國の
意見は大に列國と其趣を異にし居り申候然るに

近來支那が日英の保全開放主義を難有がること
、ありたりは露國の大迷惑にして露國新聞も考少
支那に對する口調を變じ来りやリテルブルガス
キヤウエドスチ新聞の如きは只回清朝の七滅を
論じ是迄清朝の後見者を以て自ら任じ居たるに
一 鋼に比す小は容易なりざる變調に有て候勿々不

露國真に戦ふの意ありや

露國は吾輩に對して涉々しき解答を下さざり
其時日を費したるは畢竟すに極東の戦備完
らざればなり近着のノウエウレエヤは其消息
を漏して曰く刻下我等は假定戦場を占領し且つ
有る利益を保持せりさ小く猶一個の缺陷を有
す是は極東に於ける兵備の實力が比較上薄弱な
ることたり目下の極東に於ける我陸海軍は未だ
充分なる勢力を示す能はずし且つ小は徒に
敵國を刺激せしむるの恐あり露國にして滿州に
三十万の兵士を駐屯し旅順に二十隻の戦艦を
浮ぶるを得ば日本人の心機一轉し列國の喧騒を

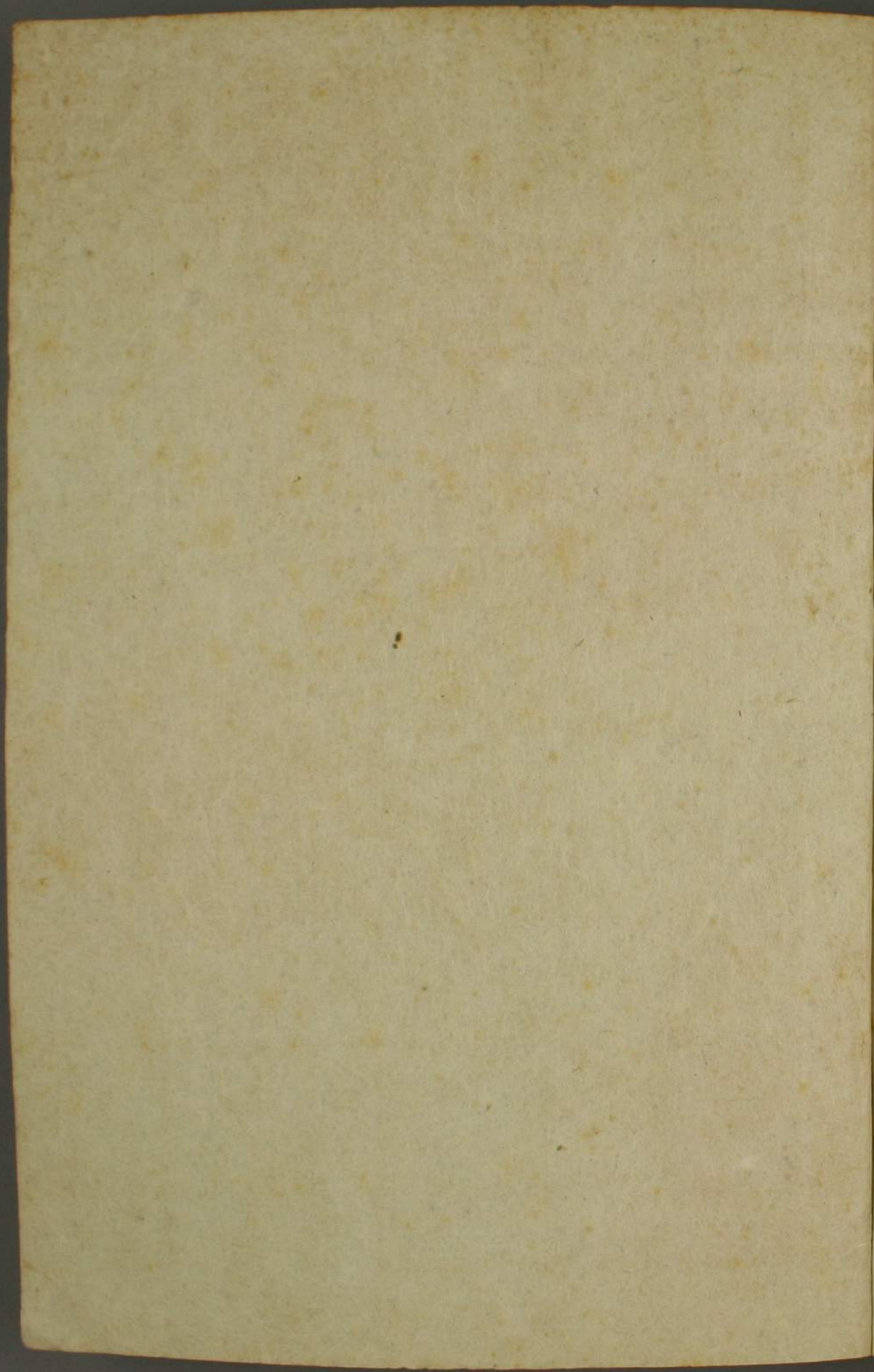
鎮守あり要するに橋組折衝の裡に結果を収め
んとするは尤なる誤り有り彼の特基を弄ぶ者は
先づ優勝なる勢と進めし敵手と強きさしと露国
は今日に於て先づ劣弱なる兵力を出しつゝある
にあらずや云々

露国軍事彙報

(最近の露字新聞に依る)

十月下旬露兵二十六名は有名なる強賊ツンヤ
リンの率加る馬賊と追窮せんとし新成廳地方に
赴きに一處らざり伏兵に逢ふて敵々に敗北しレ
ウシンスキー中尉は深手を負ひのち危の兵士は戦
死し九名は會傷を負ひり△明年極寒に派遣さる
る軍艦は新造戦艦スウオロウ候(排水量一万三
千五百噸)運送艦カムヤトカ(排水量七千二百
噸)有り後者は石炭兵士を運搬すべく前者は
明年ケロンスタートに廻航し建造を竣へ艦装を
たすべし△露国海軍者は東洋艦隊擴張の爲め甲

架巡洋艦の建造に着手せり之は新式の艦形に屬
し大砲連射砲を悉くターレットに据付け銅版を
以て構成せり之、部分悉く排水量は一万余噸
あり云々

This image shows a blank page with a blue-lined grid pattern, resembling a ledger or account book page. The grid consists of vertical lines forming columns and horizontal lines forming rows. The page is positioned on the right side of an open book. There is a small blue mark on the right edge of the page.

